

## 「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(2)

— ガンのヘンリクス 『定期討論のスンマ』 a.1, q.2 —

“*utrum contingat hominem aliquid scire sine divina illustratione*”

*Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2:

A Japanese translation with the Latin text, an introduction, and notes

加藤雅人  
Masato Kato

This is a Japanese translation with the Latin text, an introduction, and notes of Henry of Ghent's *Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2. Henry's Latin text used here is from *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, art.1-5, ed. Gordon A. Wilson (Ancient and Medieval Philosophy. De Wulf-Mansion Centre. Series II: Henrici de Gandavo Opera Omnia, vol.21), Leuven: Leuven University Press, 2005, pp. 3-28. I have received written permission to use it from the editor Prof. Gordon A. Wilson with the following words, "The Latin text is copyrighted and is published here with the permission of the editor, and with the knowledge and consent of the De Wulf-Mansion Center and Leuven University Press." I am much obliged to Prof. Wilson and those others concerned.

Henry of Ghent (Henricus de Gandavo/ Gandavensis; d. 1293) is a thinker active and most influential at Paris University during the last quarter of the 13<sup>th</sup> century between the age of Thomas Aquinas (d. 1274) and Duns Scotus (d. 1308). The second question (q.2), *utrum contingat hominem aliquid scire sine divina illustratione*, in the first article (a.1) on the possibility of human knowledge (*de possibilitate sciendi*) in Henry's *Summa*, considers whether a human being can know something without divine illumination. While many medieval thinkers before Henry assumed that the sincere truth of knowledge requires some divine illumination, most thinkers after him, in particular Duns Scotus, denied this doctrine. So Henry was the last great thinker who defends the theory of divine illumination.

### Key words

① medieval philosophy ② Henry of Ghent ③ illumination ④ knowledge ⑤ scepticism

①中世哲学 ②ガンのヘンリクス ③照明 ④知識 ⑤懐疑主義

## はじめに

ここに翻訳するのは、13世紀の思想家ガンのヘンリクス『定期討論のスμμα』第1項第2問である。翻訳のテキストとして、批判校訂版『ガンのヘンリクス全集』第21巻所収の *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, art.1-5, ed. Gordon A. Wilson (Ancient and Medieval Philosophy. De Wulf-Mansion Centre. Series II: *Henrici de Gandavo Opera Omnia*, vol.21), Leuven: Leuven University Press, 2005, pp. 29-69 を用いる<sup>1)</sup>。

## 第2問「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」の論点

第1問「人間は何かを知りうるか」<sup>2)</sup>に続いて、本第2問では「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」<sup>3)</sup>が問われる。論点は、神の特別な照明なしに自然本性的努力のみによって人間は何かを知ることにはできないと主張する異論によって明らかになる。すなわち、人間は何であれものについて「純粋に自然本性的な知」を獲得することができるのか、ということが問われているのである。これに答えて、ヘンリクスは、あるもの（たとえば、結論）を別のもの（たとえば、諸原理）を通じて知るという人間の知識構造から出発する。もし、我々が諸原理を純粋に自然本性的に知ることができるなら、それらの諸原理から引き出される結論も純粋に自然本性的に知ることができるはずである。しかし、神の特別な啓示なしに純粋に自然本性的には知ることができない諸原理によって成り立つ知の領域、すなわち信仰に関わる知の領域が存在することを、ヘンリクスは認める。

だからといって、神の特別な照明の必要性をすべての知の領域にまで拡張し、神の啓示なしには人間は何も知ることにはできないとする立場を、ヘンリクスはとらない。このような立場をとる人々は、「これは、アウグスティヌスがすべての著作のなかで、誰であれ真を見る者は、第一真理、永遠の規則、あるいは永遠の光においてそれを見たと論じるとき、彼の念頭にある考えだ」<sup>4)</sup>と論じた。ヘンリクスは、彼らの考え方は人間の知性から自然本性的な働きを奪うことによって「被造知性の尊厳と完全性を多いに貶める」<sup>5)</sup>として、このような考え方に反対する。そして、「それゆえ、人間は、神の特別な照明なしに自己の魂によって何かを知り認識することができ、しかも純粋に自然本性的にこのことができるということを、端的に認めなければならない」<sup>6)</sup>という自己の立場を明言する。ただし、ヘンリクスは、「純粋に自然本性的に (ex puris naturalibus)」という概念から、「あらゆる知性的活動や認識活動における第一作用者である第一知解者からの一般的流入」<sup>7)</sup>を除外しない。そのような神からの「一般的流入 (generalis influentia)」は、「特別な照明 (specialis illustratio)」とは違って、人間の自然本性的認識活動が「自然本性的」であることを妨げないからである。

感覚的認識に関しては、前問 (q.1) で示されたように、「確実な感覚的認識によって何かを

知ることや認識することができる」、また「純粹に自然本性的なものによって [可能である]。というのも、諸感覚の最初の可感的対象は何らかの自然的必然性によって感覚を変化させ、それ [最初の可感的対象] によって、後続のすべての可感的対象は、再び自然的必然性によって、外 [部感覚] であれ内 [部感覚] であれ、感覚を変化させるからである」<sup>8)</sup>と、ヘンリクスは主張する。

しかし、知性的認識に関して、ヘンリクスは、事物について真なるものを知ることと真理を知ることを区別する。これは、知性の側と対象の側の二つの理由による。知性の側からの理由として、ヘンリクスは「単純知解 (simplex intelligentia)」(真なるものの認識に関わる) と「判断 (iudicium)」(真理の認識に関わる) という二つの働きを区別する。対象の側からの理由として、彼は、ものが何であるかを認識するための志向性ともものが各々の種の真なる事物であることを認識するための志向性とを区別する。すなわち、まず第一に、我々はある事物において真なるものを認識し、第二に、事物の真理を認識する。たとえば、単純知解によって、我々は事物の何性 (馬の何性や人間の何性) を認識し、判断によって、我々の認識している特定の事物が真なる馬や真なる人間であることを認識する。さらに、ある特定の馬や人間が真なる馬や人間であることを認識するためには、神の範型 (それに則して特定の被造物が創造される) を認識する必要があると、ヘンリクスは考える。ここでヘンリクスは、「真なるものは根源的一と類似している限りにおいて真である」(アウグスティヌス) や、「真理はものと最高度に真なるその範型との一致である」(アンセルムス) を引き合いに出し<sup>9)</sup>、いわゆる「範型的真理観」を採用している。

さらにヘンリクスは、プラトンを引き合いに出して、二つの範型という考え方を提示する。ヘンリクスの説明によれば、「第一のものの範型は、魂のもとに存在するものの普遍的種 [形象] であり、それによって [魂は] その [種の] あらゆる個体の知を獲得する。そして、それ [第一の範型] は、ものによって原因された範型である。第二の範型は、あらゆるもののイデア的理念を内含する神の技術知である」<sup>10)</sup>。被造の範型は、可知的形象である場合と、知性の外にある像 (たとえば、ヘラクレスの絵) 場合がある。可知的形象の場合、それは何かを知るための媒体にすぎず、その形象自体が認識の対象ではない。像 (たとえば、ヘラクレスの絵) の場合、その像自体が認識の対象である。このことは、ヘラクレスの実物と会って、絵の像と実物を見比べる場合を考えればわかる。

ヘンリクスによれば、アリストテレスは「ものの知識と真理の認識が、人間によって純粹に自然本性的に、しかも、可変的な自然的諸事物について、獲得されると考えた」<sup>11)</sup>。しかし、「我々の中にある獲得されたそのような [第一の] 範型によって、真理の絶対確実で不可謬な知 (certa omnino et infallibilis notitia veritatis) を我々が得ること、これは3つの理由でまったく不可能である」<sup>12)</sup>とヘンリクスは主張する。第一の理由は、事物 (そこから範型が抽象される) の可変性にもとづく。第二の理由は、人間の魂それ自体が可變的で誤謬を被りやすいため、不

変的で誤謬を被り得ない規準による矯正を必要とするということにもとづく。第三の理由は、そのような可変的で誤謬を被りやすい表象から抽象された範型は、真理との類似性だけでなく虚偽との類似性も持っているということにもとづく。これらの理由から、ヘンリクスは「明らかに、人間が確実な知識 (*certa scientia*) と不可謬な真理 (*infallibilis veritas*) を認識することができるとしても、このことは、どれほど純化され普遍化された範型であろうと、ものから感覚を通じて抽象された範型を参照することによっては、可能にはならない<sup>13)</sup>」として、「純正真理は、…ただ永遠の範型に則してのみ察知されうる<sup>14)</sup>」という自己の主張へと到る。

### 真理の確実な知識と確実性の規準

ところで、「真理の絶対確実で不可謬な知 (*certa omnino et infallibilis notitia veritatis*)」、「確実な知識 (*certa scientia*)」といった表現における「確実な (*certus, a, um*)」とはどのような概念であろうか。「確実性」を意味する *certitudo* というラテン語は、*cernere* という動詞から派生し、*cernere* とは、「証拠を見てから決定 (判決) する」という意味を表す<sup>15)</sup>。したがって、確実性とは「判断の確かさ」のことであって、知性が判断を行なう際に知性のなかに誤謬への恐れが存在せず、その判断が真であることへの堅い同意が存在する状態をいう。その意味で、確実性とは本来、事物や命題の性質ではなく、認識主体の同意の堅さを表わす概念であり、本能的には心的なものである。それは、肯定も否定もしない「疑い (*dubitatio*)」や、判断を蓋然的に受け入れる「憶見 (*opinio*)」などとは区別された心的情態である<sup>16)</sup>。そして一般に懷疑主義とは、誤謬を避けるために判断そのものを停止ないしは保留して、肯定も否定もしない「疑い」の状態に止まる立場をいう<sup>17)</sup>。

新アカデミア派の懷疑主義者たちの考えによると、ある命題が真であるという判断が確実な知とみなされるために充たすべき基準は二つある<sup>18)</sup>。(1) その命題が真であり、かつ (2) 認識者が確固たる印によって「真なる命題」を「真らしき命題」から識別できる、ということである。われわれのなかに、基準 (1) を充たす判断がありうることを彼らは決して否定しない。しかし、基準 (2) をも充たすような判断はないと彼らは考えた。

上述のように、ヘンリクスは範型的真理観をとった。真理とは「ものとその範型との一致」(*conformitas rei cognitae ad suum exemplar*) と規定される。この規定においてヘンリクスの念頭にあった範型は、それ自体で独立して存在するプラトンの範型ではなく、知性のなかに存在する範型であった。ヘンリクスによれば、事物の範型は二つある。第一の範型は人間知性の中にある「普遍的形相 [種] (*species universalis*)」であり、この範型は事物に由来する。第二の範型は神の精神の中にある「イデア的理念 (*ideales rationes*)」である。これは神の精神のなかにあって神が世界を創造する際に利用する「技術知 (*ars divina*)」である。したがって、この第二の範型は事物に由来するのではなく、逆に事物の原因である。ヘンリクスは、事物に

由来する第一の範型によって(すなわち、自然本性的な認識によって)「真理の絶対確実で不可謬な知」(*certa omnino et infallibilis*)は得られないと考えた。このことの原因を、上述のように、三つの観点から説明する。

(1) 認識対象の観点：この議論は「認識対象の可変性」を根拠としている。すなわち、一般に可変的なものが不変的な結果を生むことはありえない。ところが、知の対象である可感的なものは可変的である。それ故、可感的なものから抽象された範型に基づく真理の知もまた、可変的であって絶対確実とは言えない。

(2) 認識主体の観点：この議論は「認識主体の可変性」を根拠としている。すなわち、人間の知性はあるとき真理を認識するとしても、不変的にそのような状態にあるわけではなく、誤謬を犯す可能性を持っている。したがって、知性は絶対確実な真理の知を得ることはできない。

(3) 認識媒体の観点：この議論は認識媒体による「真偽の識別不可能性」を根拠としている。我々には、夢や狂気においても、目覚めている正常な時と全く同じ感覚像が生じる。目覚めているときの像は現実の対象と対応する真なる像であるが、夢のなかの像は現実と対応しない偽なる像である。つまり、表象像およびそれから抽象された形象は真なる像の類似であると共に偽なる像の類似でもあり、形象に関する限り真偽の識別は不可能である。したがって、そのような形象(すなわち、事物から獲得された範型)によって得られる知は、常に偽への可能性を内包しており、真理の絶対確実な知とはいえないわけである。

## 神の特別な照明

第(3)の観点から明らかなように、ヘンリクスは「確固たる印によって真が偽から識別されること」というアカデメイア派の人々の確実性の基準を受け入れ、彼らの基準を満たすような知の確実性を追求した。結局この箇所ではヘンリクスが言おうとしたことは、可変的なこの世界にあっては、懐疑主義者の確実性の基準を認める立場にたつて議論を進めれば、我々は経験知に関して(それがどれほど確実と我々に思われようとも)懐疑的にならざるをえないということであった。しかし、ヘンリクスは決して懐疑主義者ではなかったため、このような懐疑的な立場(=判断停止の状態)に止まるわけにはいかなかった<sup>19)</sup>。それは人間知性が可変性のなかに埋没することを意味する。人間知性が可変性を脱却して、絶対確実な真理を獲得するためには、我々の知の確実性を保証する我々を越えたものによる根拠付け、すなわち神の「特別な照明」(*illustratio specialis*)が要請される、とヘンリクスは考えた。したがって、彼は直ちに第二の範型へと向かった。

さて、第二の範型によって得られる知は、事物と神の精神の中にあるアイデアとの一致としての真理の知である。ヘンリクスはそのような真理を「純正真理」(*veritas sincera*)と呼ぶ。事物の純正真理を知るためには、神のアイデアを知らなければならないが、人間が神の本質を直視

することは、少なくともこの世界では特別の場合を除いて不可能である。したがって、神は「認識の対象 (obiectum)」としてではなく「認識の観点 (ratio)」として働くことによって我々を照明する。

注

- 1) 著作権使用について快く承諾して頂いた編者 Gordon Wilson 教授、De WulfMansion センター、および Leuven 大学出版局に対して感謝する。翻訳にあたって、以下の英訳を参照した。*Henry of Ghent's Summa of Ordinary Questions Article One: On the Possibility of Knowing*, tr. by Roland J. Teske, S. J., St. Augustine's Press: South Bend, Indiana, 2008; "Henry of Ghent Can a Human Being Know Anything without Divine Illumination?", tr. by R. Pasnau, in *Cambridge Translations of Medieval Philosophical Texts. Volume III: Mind and Knowledge*, Cambridge U.P., 2002, pp. 109-135.
- 2) cf. Henricus, *Summa*, a.1, q.1. 加藤雅人訳「人間は何かを知りうるか」(1) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.1—、『外国語学部紀要』第7号、関西大学外国語学部、2012年10月、pp. 121-147; 「人間は何かを知りうるか」(2) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.1—、『外国語学部紀要』第8号、関西大学外国語学部、2013年3月、pp. 151-178。
- 3) cf. Henricus, *Summa*, a.1, q.2. 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(1) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2—、『外国語学部紀要』第9号、関西大学外国語学部、2013年10月、pp. 141-166。
- 4) Henricus, *Summa*, a.1, q.2 c. [ed. by Wilson, p. 32, ll.71-3]; 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(1) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2—、『外国語学部紀要』第9号、2013、pp. 149-150。
- 5) *Ibid.* [ed. by Wilson, p. 32, ll.76-7]; 前掲拙訳、p. 150。
- 6) *Ibid.* [ed. by Wilson, p. 35, ll.118-120]; 前掲拙訳、p. 153。
- 7) *Ibid.* [ed. by Wilson, p. 35, ll.122-124]; 前掲拙訳、p. 153。
- 8) *Ibid.* [ed. by Wilson, p. 35, ll.135-140]; 前掲拙訳、p. 153。
- 9) *Ibid.* [ed. by Wilson, p. 40, ll.227-231]; 前掲拙訳、p. 157。
- 10) *Ibid.* [ed. by Wilson, p. 40, ll.235-238]; 前掲拙訳、pp. 158-159。
- 11) *Ibid.* [ed. by Wilson, p. 42, ll.263-265]; 前掲拙訳、p. 159。
- 12) *Ibid.* [ed. by Wilson, p. 43, ll.282-284]; 本訳稿、p. 115。
- 13) *Ibid.* [ed. by Wilson, p. 45, ll.333-336]; 本訳稿、p. 117。
- 14) *Ibid.* [ed. by Wilson, p. 50, ll.417-418]; 本訳稿、p. 121。
- 15) 加藤雅人『ガンのヘンリクスの哲学』創文社、1998年、第2・第3章参照。
- 16) cf. R. F. O'Neil, "Certitude", *The New Catholic Encyclopedia*, New York, 1967, IV, p. 408.
- 17) cf. J. Annas & J. Barnes, *The Modes of Scepticism. Ancient Texts and Modern Interpretations*, Cambridge U.P., 1985. 『懐疑主義の方式—古代のテキストと現代の解釈』藤沢令夫監修・金山弥平訳、岩波書店、1990年、とくに第一・第二章。
- 18) Henricus, *Summa*, a.1, q.2 c. [ed. by Wilson, p. 45, ll.321-330]; 本訳稿、p. 117。
- 19) ヘンリクスの出発点は、我々がすでになんらかの確実な知を所有している、という事実であったと思われる。彼は、知を獲得したいという人間の自然的欲求がその目的に達しないはずはなく、また、

「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(2) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2— (加藤)

我々が我々の知を疑うとき既に何らかの確実な知、すなわちわれわれが疑っているという事実の知が獲得されている、と語っている。cf. Henricus, *Summa*, a.1, q.1

## Henricus de Gandavo, *Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2<sup>1</sup>

(the second part of three parts series)

Sed quod per tale exemplar acquisitum in nobis habeatur a nobis certa omnino et infallibilis notitia veritatis, hoc omnino est impossibile triplici ratione, quarum prima sumitur ex parte rei de qua exemplar huiusmodi abstractum est, secunda ex parte animae in qua huiusmodi exemplar susceptum est, tertia ex parte ipsius exemplaris quod a re in anima susceptum est.

Prima ratio est quod exemplar tale, eo quod abstractum est a re transmutabili, necesse habet aliquam rationem transmutabilis. Unde quia res naturales magis sunt mutabiles quam mathematicae, ideo posuit PHILOSOPHUS maiorem haberi certitudinem scientiae de rebus mathematicis quam de naturalibus per species earum universales, et hoc non nisi propter specierum ipsarum existentium apud animam transmutabilitatem. Unde hanc causam incertitudinis scientiae rerum naturalium ex sensibilibus acceptam AUGUSTINUS, pertractans 83 Quaestionum q.e 9a, dicit quod «*a sensibilibus corporis non est expetenda sincera veritas*», et quod «*saluberime admonemur averti ab hoc mundo ad Deum, id est veritatem quae intelligitur et in interiori mente capitur; quae semper manet et eiusdem naturae est, tota alacritate converti*».

Secunda ratio est quod anima humana, quia mutabilis est et erroris passiva, per nihil quod mutabilitatis aequalis vel maioris est cum ipsa, potest rectificari ne obliquetur per errorem et in rectitudine veritatis persistat. Ibi exemplar omne quod recipit a rebus naturalibus, cum sit inferioris gradus naturae quam ipsa, necessario aequalis vel maioris mutabilitatis est cum ipsa. Non ergo potest eam rectificare ut persistat in infallibili veritate. Et est ratio AUGUSTINI De vera religione probantis per hoc immutabilem veritatem per quam anima habet certam scientiam esse super animam, dicens: «*Lex omnium artium cum sit omnino immutabilis, mens vero humana, cui talem legem videre concessum est, mutabilitatem pati possit erroris, satis apparet super mentem nostram esse legem quae veritas dicitur*», quae sola sufficit ad rectificandum mentem commutabilem et obliquabilem in infallibili cognitione, de qua non habet mens iudicare, sed per illam de omni alio. De omni enim eo quod est inferius mente, habet mens potius iudicare quam per illud iudicare de alio, secundum quod determinat ibidem.

Tertia ratio est quod huiusmodi exemplar, cum sit intentio et species sensibilis rei abstracta a phantasmate, similitudinem habet cum falso sicut cum vero, ita quod, quantum est ex parte sua internosci non potest; per easdem enim imagines sensibilibum in somno et in furore iudicamus imagines esse res ipsas, et in vigilia sani iudicamus de ipsis rebus. Veritas autem sincera non percipitur nisi discernendo eam a falso. Igitur per tale exemplar impossibile est certam

## ガンのヘンリクス『定期討論のスヌマ』 a.1, q.2<sup>1)</sup>

(承前)

しかし、(B1) 我々の中にある獲得されたそのような〔第一の〕範型によって、真理の絶対確実で不可謬な知を我々が得ること、これは3つの理由でまったく不可能である。第1の理由は、このような範型が抽象される事物の側から取られる。第2の理由は、このような範型が受け取られる魂の側から〔取られる〕。第3の理由は、事物から来て魂において受け取られる範型の側から〔取られる〕。

第1の理由は、そのような範型は、可変的なものから抽象されるので、ある種の可変的性格を必然的にもっているということである。したがって、自然的な事物は数学的事象より可変的であるから、事物の普遍的な形象〔種〕を通じて、自然的な事物についてよりも数学的事象についての方が、知識のより大きな確実性が得られると、哲学者〔アリストテレス〕は考えた。しかもこのことは、魂の中に存在する、事物の形象〔種〕の可変性を原因とするに他ならない。ここから、自然的な事物に関する知識が持っている、可感的な事物から受け取られた、このような不確実性の原因を取り上げて、アウグスティヌスは、『83問題集』において、『純正真理は身体諸感覚から求められるべきではない』と言ひ、また『この世界から神へと、すなわち、知解され内なる心の中で把握され、つねに同じ』本性『のまま存続する真理へと転向し、あらゆる熱意をもって回心することが自分のためになると、我々は忠告されている』と言ふ<sup>33)</sup>。

第2の理由は、人間の魂は、可変的で誤りを被りうるから、その魂と同等かそれ以上の可変性をもっているいかなるものによっても、誤りによって曲がらないように、真理の正しさととどまるように、矯正されることはできない。ところで、魂が自然的な事物から受け取った範型はすべて、魂よりも低い段階の本性をもっているため、必然的に魂と同等かそれ以上に可変的である。したがって、〔そのような範型は〕不可謬な真理にとどまるようにそれ〔魂〕を矯正することはできない。このことによって、アウグスティヌスは、魂が確実な知識を得るための不変の真理は魂を超越していることを証明し、『真の宗教について』において言う。『あらゆる技術知の法則は、まったく不変的である—これに対して、そのような法則を見ることが認められた人間の心は、誤りという可変性を被りうる—から、真理と呼ばれるその法則が我々の心を超越していることは、十分明らかである』<sup>34)</sup>。これ〔法則〕だけで、可変的で曲がりうる心を不可謬な認識において矯正するのに十分である。これ〔法則〕について、心は判断することはできず、これ〔法則〕を通じて心は他のあらゆるものについて判断する。というのも、アウグスティヌスが同所<sup>35)</sup>で規定しているように、それ〔心より低いもの〕を通じて他のものを判断するというより、むしろ心より低いものすべてについて、〔心は〕判断することができるからである。

第3の理由は、このような〔第一の〕範型は、表象像から抽象された、可感的な事物の志向性すなわち形象〔種〕であるから、真との類似性だけでなく偽との類似性も有する。こうして、範型の側に関する限り識別されえない。というのも、我々は、目覚めている正常なときに可感的な事物の像を通じて事物そのものについて判断するが、睡眠中や狂気の場合も、それと同じ像を通じて、その像

haberi scientiam et certam notitiam veritatis. Et ideo si debeat certa scientia haberi veritatis, oportet mentem avertere a sensibus et sensibilibus et ab omni intentione quantumcumque universali et abstracta a sensibilibus ad incommutabilem veritatem supra mentem existentem, «*quae non habet imaginem falsi a qua discerni non possit*», ut dicit AUGUSTINUS 83 Quaestionum q.<sup>e</sup> 9<sup>a</sup>, ubi pertractat istam rationem.

Sic ergo patet quod duplex est veritas et duplex modus sciendi veritatem, quos innuit AUGUSTINUS retractans illud quod dixit I<sup>o</sup> Soliloquiorum: «*Deus qui nisi mundos, verum scire voluisti*», dicens: «*Potest responderi multos etiam immundos multa scire vera, neque enim definitum est hic quid sit verum, quod nisi mundi scire possunt et quid sit scire*». Patet etiam quod certam scientiam et infallibilem veritatem, si contingat hominem cognoscere, hoc non contingit ei aspiciendo ad exemplar abstractum a re per sensus quantumcumque sit depuratum et universale factum. Propter quod primi ACADEMICI sententiam PLATONIS imitantes — «*idem quippe sunt Academici qui Platonici*», ut dicit AUGUSTINUS in Epistola ad Dioscorum — negabant aliquid sciri omnino contra STOICOS, qui solum ponebant sensibilia in mundo, et hoc intelligendo de notitia veritatis sinceræ, ponendo omnem notitiam veritatis sinceræ de quacumque re haberi non posse nisi aspiciendo ad exemplar secundum.

Qui tamen bene discernebant quod aliqualis notitia veritatis posset percipi per sensus et mediantibus sensibus per intellectum, quam tamen putabant non mereri dici scientiam, secundum quod dicit AUGUSTINUS III<sup>o</sup> De Academicis: «*Sunt qui omnia ista quae corporis sensus attingit opinionem posse gignere confitentur; scientiam vero negant, quam volunt intelligentia contineri remotamque a sensibus in mente vivere*». «*Cum enim*», ut dicit in libro II<sup>o</sup>, «*eis nihil turpius visum est quam opinari et nihil percipi posse concluderunt, ut nihil sapiens umquam approbaret*», sed id quod probabile et verisimile appareret sequeretur. Unde non distinxerunt de certa notitia qua percipitur id quod verum est in re, sive per sensum sive per intellectum, a notitia qua scitur veritas ipsius rei, neque etiam de hac distinxerunt quod quaedam est veritatis notitia liquida et sincera, alia vero phantastica per phantasmata et imagines rerum obumbrata, sed, ut videbatur ex eorum verbis, simpliciter aliquid sciri posse negabant.

Et ideo posteriores ACADEMICI verba positionis illorum tenentes, sed mentem ipsorum ignorantes, omnem scientiam et veritatis perceptionem penitus negabant, non solum quoad perceptionem intellectus de notitia quae pertinet ad sapientiam et de rebus pertinentibus ad philosophiam, sed etiam quoad perceptionem sensus, ut expositum est in quaestione praecedenti.

Negabant autam illi primi ACADEMICI omnem scientiam et notitiam veritatis simpliciter

を事物そのものであると判断するからである。しかし、純正真理は、それを偽と識別することによってしか知覚されない。したがって、そのような〔第一の〕範型を通じて、真理の確実な知識や確実な知は得られない。それゆえ、真理の確実な知識を得るためには、心は感覚と可感的な事物から、またあらゆる志向性（どれほど普遍的で可感的な事物からどれほど抽象されていようと）から、心を超越している不変的真理へと転向しなければならない。アウグスティヌスは、この理由を扱っている『83問題集』で、《この真理は、不可識別的な、偽との〔似〕像をもってはいない》と言う<sup>36)</sup>。

それゆえ、明らかに、真理は二通りあり、真理の知り方も二通りある。これについて、アウグスティヌスは、『ソリロキア』第1巻で言ったこと《神よ、あなたは心の清い人々にしか真を知ることを見望まない》<sup>37)</sup>を再考して、言う。《多くの心清らかでない人々でさえも多くの真を知っていると答えることができる。というのも、心の清い人々しか知りえない真とは何か、また知るとは何か、ということが定義されていないからである》<sup>38)</sup>。また、明らかに、人間が確実な知識と不可謬な真理を認識することができるとしても、このことは、どれほど純化され普遍化された範型であろうと、ものから感覚を通じて抽象された範型を参照することによっては、可能にはならない。だからこそ、初期アカデメイア派は、プラトンの考えに倣って—アウグスティヌスが『ディオスコルスへの書簡』において言うところによれば《アカデメイア派はプラトン派と同じである》<sup>39)</sup>—、この世界に可感的な事物しか措定しないストア派に反対して、〔第一の範型によって〕何が知られることを全面的に否定した。しかも、これ〔知の否定〕は、何であれものについての純正真理の知はすべて第二の範型を参照することによってしか得られないと考えることによって、純正真理の知について理解していたからであった。

しかし、彼ら〔初期アカデメイア派〕は、感覚によって、そして感覚を介して知性によって、真理のある種の知が知覚されうることに、十分気づいていた。しかし、この知は知識と呼ぶには値しないと考えた。アウグスティヌスは、『アカデメイア派駁論』第3巻において言う。《身体が感覚が手に入れた〔すべてのものは、憶見を生み出しうることは認めるが、知識を〔生み出すことを〕否定する人々がいる。知識は、感覚から遠く離れて、知解の中に内含され心の中に棲む〔と考える〕ことを彼らは欲した》<sup>40)</sup>。じっさい、アウグスティヌスが同書第2巻で言うように、《憶見を持つこと以上に恥ずべきことはない》、《何も知覚されえない》と彼らには思われた《ので、賢明な人は何も是認せず》<sup>41)</sup>、むしろ蓋然的で真らしきものが帰結するだろうと彼らは結論した。したがって、彼ら〔初期アカデメイア派〕は、確実な知について、感覚によってであれ知性によってであれ、事物において真なるものが知覚される知と、そのものの真理が知られる知とを区別せず、またこれ〔確実な知〕について、明晰で純正な真理の知と、ものの表象や像によって曖昧化された表象的な知とを区別せず、彼らの言葉から分かるように、何が知られうることを端的に否定したのである。

それゆえ、後のアカデメイア派は、彼ら〔初期アカデメイア派〕の立場を表す言葉は維持しながらもその精神を知らずに、知恵に関係する知や哲学に関係する事柄についての知性の知覚に関してだけでなく、感覚の知覚に関しても、あらゆる知識と真理の知覚を完全に否定したことは、前問で述べたとおりである。

しかし、初期アカデメイア派は、純正真理の知についてのプラトンの真なる考えを適切な時まで

quantum ad verba sua, ut veram sententiam PLATONIS de sinceræ veritatis notitia ad tempus opportune occultarent, quam demum tempore congruo ad hoc tertium genus ACADEMICORUM propalaret, secundum quod dicit AUGUSTINUS II<sup>o</sup> De Academicis: «Hoc mihi videntur egisse et ad occultandum tardioribus et ad significandum vigilantioribus sententiam suam». «Certam enim habuerunt Academici de veritate scientiam et eam temere ignotis vel non purgatis animis prodere noluerunt». «Quid igitur», ut dicit libro III<sup>o</sup>, «placuit tantis viris agere ne in quemquam cadere veri scientia videretur? Audite», inquit, «iam paululum attentius, non quid sciam, sed quid aestimem. Plato vir sapientissimus et eruditissimus temporum suorum fuit, quem certum est duos sensisse mundos esse: unum intelligibilem, in quo veritas ipsa habitat, alterum autem istum sensibilem ad illius imaginem factum; et de illo in eam quæ se cognosceret animam velut exspoliri et quasi serenari veritatem, de isto autem instructorum animis non scientiam, sed opinionem, posse generari». «Haec et alia huiusmodi videntur inter eius successores quantum potuerunt esse servata et pro mysteriis custodita. Non enim facile ista percipiuntur nisi ab eis qui se ab omnibus vitiis mundantes et in aliam quandam plus quam humanam consuetudinem vendicant, graviterque peccat quisquis ea sciens quoslibet homines docere voluerit. Quam ob rem cum Zeno, princeps Stoicorum, nec quidquam esse præter hunc sensibilem mundum nihilque agi nisi corpore, nam Deum et ipse ignem putabat, prudentissime atque utilissime mihi videtur Archesilas, cum illud late serperet malum, occultasse penitus Academiae sententiam et quasi aurum inveniendum posteris obruisse. Quare cum in falsas opiniones ruere sit turba paratior et consuetudine corporum omnia esse corporea facillime, sed noxie, credantur, instituit vir acutissimus dedocere potius quos patiebatur male doctos, quam docere quos dociles non arbitrabatur». «Cum enim», ut dicit in Epistola ad Dioscorum, «Epicurei numquam falli corporis sensus dicerent, Stoici autem falli aliquando concederent, utrique tamen regulam comprehendendæ veritatis in sensibus ponerent, quis istis contradicentibus audiret Platonicos, si ab eis diceretur non solum esse aliquid quod neque tactu corporis neque olfactu neque gustu vel auribus aut oculis percipi possit, neque aliqua imaginatione cogitari, sed id solum vere esse atque id solum percipi posse quod incommutabile et sempiternum est, percipi autem sola intelligentia, qua veritas, quomodo attingi potest, attingatur? Cum ergo talia sentirent Platonici quæ neque docerent carni deditos homines, neque tanta essent auctoritate apud populos ut credenda persuaderent donec ad eum habitum perduceretur animus quo ista capiuntur, elegerunt occultare sententiam suam, et contra eos disserere qui verum se invenisse iactarent, cum inventionem ipsam veri in carnis sensibus ponerent».

隠すために、表現に関する限り、あらゆる知識と真理の知を端的に否定した。そして、それ〔プラトンの真なる考え〕を、最終的に第三のアカデメイア派が適切な時に明らかにした。アウグスティヌスが言うところによれば、《彼らは自分たちの考えを頭の鈍い人には隠して頭の鋭い人には示すように》、これ〔こういう表現〕を《選んだと、私には思われる》<sup>42)</sup>。《というのも、アカデメイア派の人々は真理について確実な知識を持っており、その知識を無知な者や精神の純粹でない人々にむやみに知らせることを欲しなかったからである》<sup>43)</sup>。《なぜ、真についての知識はどんな人の手にも入らないと思わせるようにすることが、これほど偉大な人々に気に入ったのか？さあ少し注意して聞け。私が知っていることではなく、私が考えていることを。彼らの時代において最も知恵に富み最も学識ある人であったプラトンは》<sup>44)</sup>、たしかに、《二つの世界、すなわち、一方は真理それ自体が存在する可知的世界、他方はその可知的世界の〔似〕像として作られたこの可感的世界、の存在を感知していた。そして、真理は、前者から自己を認知する魂へと、いわばびかびかに磨かれ、いわば澄みわたって輝くが、愚かな人々の魂には、後者から、知識ではなく臆見が生じる》<sup>45)</sup>。《このようなことやその他この類のことは、プラトンの後継者たちの間で、できる限り受け継がれ奥義として守られたように思われる。というのは、このようなことはあらゆる悪徳から自分を清めて、人間より高い別の何らかの生き方をしようと努力する人々でなければ、容易に知覚されないからであり、このようなことを知って、どんな人にも〔それを〕教えようとする人は重い罪を犯すからである。こういうわけで、ストア派の始祖であるゼノンが、この可感的世界以外には何ものもなく、あらゆるものは物体によってのみ動かされ、じっさい神自身も火であると考えたので、アルケシラオスが、この悪が広く流布されるのを見た時、アカデメイア派の見解を完全に隠し、いわば後世の人々によって見出されるべき黄金のようにそれを埋めたのは、きわめて賢明かつ有益であったと思われる。こういうわけで、多くの人々は誤った臆見へと突進し、そして彼らは物体に慣れているがゆえに、すべては物的であると容易に、有害な仕方、信じるに至った。きわめて鋭敏なアルケシラオスは、教えにくい人々を教えるよりも、誤って悪しき教育を受けた人々の誤謬を正そうとした》<sup>46)</sup>。アウグスティヌスが『ディオスコルスへの書簡』で言うように、《じっさい、エピクロス派は身体感覚はけっして欺かれぬと言うが、ストア派はそれ〔身体感覚〕ときには欺かれることを認めている。しかし、両者ともに、真理を把握する規準を感覚においている。たがいに矛盾するこれらの人々に関して、いったい誰がプラトン派に耳を傾けるだろうか？彼らは、身体的接触、臭覚、味覚、によっても、聴覚や視覚によっても知覚されえず、想像力によって思い浮かべることでもできない何かがあると言うだけでなく、不変で永続的なもののみが真に存在し真に知覚され、しかもそれは知性（それによって、どのような仕方であれ真理が獲得される）によってのみ知覚されると言おうとするのならば。それゆえ、プラトン派の人々は、そのような見解を抱き、それを肉体に身を委ねている人々に教えなかつたから、また、人々を説得して得心する状態にまで導かれるように信じさせるだけの十分な権威を人々の間で持つてはいなかつたから、自分たちの見解を隠し、真理を発見したと自慢する人々を非難することを選んだ。なぜなら、そのような人々は真理の発見を肉体の感覚の中に位置づけたからであった》<sup>47)</sup>。

«Inde», ut ait III<sup>o</sup> De Academicis cap.<sup>o</sup> 29<sup>o</sup>, «*omnia illa nata sunt quae novae Academiae attribuuntur*». Novi enim ACADEMICI illud mysterium non scientes dixerunt ACADEMICOS veteres penitus negasse scientiam, et sic eos crudeliter infamarunt quibus posteriores fortiter restiterunt. «*Nam Carnaides primo illam calumniandi impudentiam qua videbat Archésilam non mediocriter diffamatum deposuit, et ob hoc dicitur Carnaides tertiae Academiae princeps atque auctor fuisse. Deinde ultimo Antiochus, Philonis auditor, iam velut aperire cedentibus hostibus portas coeperat, et ad Platonis auctoritatem legesque Academiam revocare, quamquam et Metrodorus id antea facere temptaverat, qui primus dicitur esse confessus non directo placuisse Academicis nihil posse comprehendere, sed necessario contra Stoicos huiusmodi arma eos sumpsisse. Post illa autem tempora omni pervicacia pertinaciaque demortua os illud Platonis, quod in philosophia purgatissimum est et lucidissimum, dimotis nubibus erroris emicuit maxime in Plotino, ut in hoc revixisse putandus sit*».

Sincera igitur veritas, ut dictum est, non nisi ad exemplar aeternum conspici potest. Sed est advertendum quod sincera veritas sciri potest aspiciendo ad hoc exemplar dupliciter: uno modo aspiciendo ad ipsum tamquam obiectum cognitum, in ipso scilicet videndo exemplatum, «*quia bene probat imaginem qui intuetur exemplar*», ut dicit AUGUSTINUS III<sup>o</sup> De Academicis cap.<sup>o</sup> 30<sup>o</sup>; alio modo aspiciendo ad exemplar illud tamquam ad rationem cognoscendi tantum.

Primo modo cognoscimus de imagine Herculis quod sit vera imago eius, videndo Herculem, et in hoc advertendo correspondentiam imaginis ad exemplar scimus quod sit vera imago eius. Hoc modo veritas cuiuslibet rei factae ad exemplar perfectissime cognoscitur viso suo exemplari. Et ideo cum omnis creatura sit imago quaedam divini exemplaris, verissime et perfectissime cognoscitur veritas cuiuslibet creaturae in eo quidquid est, videndo nudam divinam essentiam, secundum quod dicit AUGUSTINUS XI<sup>o</sup> De civitate Dei, «*Ipsi sancti angeli per ipsam praesentiam incommutabilis veritatis ipsam creaturam melius ibi tamquam in arte qua facta est quam in ea ipsa sciunt*». Unde quia non solum imago nata est cognosci per exemplar a priori, sed etiam e converso exemplar per imaginem a posteriori, ideo AUGUSTINUS per creaturas docet cognoscere qualis sit ars divini exemplaris, cum dicit in sermone I<sup>o</sup> Super Ioannem: «*Attendunt homines mirabilem fabricam et mirantur consilium fabricantis. Stupent quod vident, et amant quod non vident. Si ergo ex magna aliqua fabrica laudatur hominum consilium, vis videre quale consilium Dei est, id est Verbum Dei? Attende istam fabricam mundi. Vide quae sunt facta per verbum et cognosce quale sit*». Unde per hunc modum ex aggregata notitia omnium creaturarum tamquam una imagine perfecta divinae artis, quantum perfectior poterit esse in creaturis, posuerunt philosophi perfectam haberi cognitionem Dei,

アウグスティヌスが『アカデメシア派駁論』第3巻で言うように、《ここから、新アカデメシア派に帰されるあらゆることは生まれた》<sup>48)</sup>。じっさい、新アカデメシア派は、その奥義を知らず、古アカデメシア派が知識を全面的に否定したと語って、後のアカデメシア派と強く対立した古アカデメシア派を容赦なく名誉棄損した。《じっさい、カルネアデスは、アルケシラオスが少なからず批判された原因は〔反対論者への〕誹謗であったことを知り、過度の誹謗を最初に棄てた人であった。このために、カルネアデスはまた、第三アカデメシア派の創設者であり、かつまた主唱者であったと言われている。つぎに最終的に、フィロンの弟子であったアンテオコスが、敵が降服した今や、いわば門を開き始め、アカデメシアをプラトンの権威と主導の下へ呼びもどし始めた。実はメトロドロスもまたすでにそれを試みてはいた。彼は、何もかも把握されえないという命題はアカデメシア派の人々にとって必ずしも歓迎されてはならず、ストア派の人々に対抗するためにそのような武器をとらざるをえなかった、ということの間接的に認めた最初の人であったと言われている。しかし、それ以後、あらゆる強情と頑固が消え果てて、哲学の中で最も純粋で最も光輝くプラトンの教えは、特にプロティノスにおいて、誤謬という暗雲を払ってその輝く顔を現わし、その結果、プラトンはプロティノスにおいて復活したと考えられている》<sup>49)</sup>。

純正真理は、上述のように、ただ永遠の範型に則してのみ察知されうる。しかし、この〔第二の〕範型を参照する二通りの仕方によって、〔二通りの仕方〕で純正真理が知られることに注意すべきである。すなわち、(B2-1) 一つは、範型化されたものをまきに見ることに、それ〔第二の範型〕を、認識対象として参照することによって。なぜなら、アウグスティヌスが『アカデメシア派駁論』第3巻で言うように、《範型を直観する人が像を適切に検証する》<sup>50)</sup>からである。(B2-2) もう一つは、その範型を、ただ認識観点としてのみ参照することによって。

(B2-1) 第一の仕方、我々は、ヘラクレス [本人] を見ることによって、ヘラクレスの像について、それが彼の真なる像であることを認識する。この場合、像と範型との一致に注目することによって、それが彼の真なる像であることを我々は知る。こうして、何であれ範型に則して作られたものの真理は、その範型が見られる時、最も完全に認識される。それゆえ、すべての被造物は神の範型のある種の像であるから、神の赤裸々な本質を見ることによって、何であれ被造物の真理は、その何性において、最も真なる最も完全な仕方、認識される。アウグスティヌスは『神の国』第11巻において言う。《この聖なる天使たちは、不変の真理の現前そのものによって、被造物を、被造物自身においてよりもむしろかしこにおいて、すなわち諸物を作るための技術知において、いっそうよく知るのである》<sup>51)</sup>。したがって、〔似〕像が範型を通じてアプリアリに認識されうるだけでなく、逆に、範型が像を通じてアポストリアリに認識されうるのである。それゆえ、アウグスティヌスは、神の範型の技術知がどのようなものであるかを、被造物を通じて認識することを教えているのである。『ヨハネ福音書註解』第一巻で彼が言うところでは、《人々はすばらしい建物を見て、製作者の計画に驚嘆する。彼らはそ見たものに仰天し、見えないものを愛する。それゆえ、もし人間の計画がある巨大な建物のゆえに賞賛されるならば、あなたは神の計画、すなわち神の言が、いかなる計画であるかを見ようと欲するのか。この宇宙の建物を注目しなさい。神の言によって造られたものを見るとき、あなたは神の言がどれほどのものであるかを知るだろう》<sup>52)</sup>。したがって、この仕方〔アポストリアリに〕、被造物において可能な限り完全な、神の技術知の単一の完全な像としての、あらゆる被造物について集められた知から、後で示されるように、純粋に自然本性的

quanta ex puris naturalibus haberi poterit, ut infra videbitur.

Ad talem autem cognitionem divini exemplaris homo non potest attingere ex puris naturalibus sine speciali illustratione, nec etiam in vita ista lumine communis gratiae, secundum quod dicit AUGUSTINUS in libro De fide catholica, loquens ad Deum: «*Tua*», inquit, «*essentia et species potest dici et forma, et est id quod est, reliqua autem non sunt id quod sunt. Haec verissime potest dicere 'Ego sum qui sum'*. Haec tanta et talis est ut de eius visione *'nil in hac vita sibi usurpare mens humana audeat, quod solis electis tuis praemium in subsequenti remuneratione reservas'*», secundum quod dicitur super illud: «*Habitat lucem inaccessibilem quam nullus hominum vidit, sed nec videre potest*», scilicet «*in hac vita, post autem videbitur*». Et quod in hac vita videri non potest, verum est nisi per donum gratiae specialis, qua homo per *raptum* a sensibus *abstrahitur*, quomodo Moyses et Paulus Deum viderunt in *hac vita* per essentiam, ut dicit AUGUSTINUS de videndo Deum Ad Paulinam, et quomodo beatus «*Benedictus sub uno radio vidit totum mundum*», ut dicit GREGORIUS in IV<sup>o</sup> Dialogi, quia, cum ad ipsius divinae naturae exemplar videndum non potest attingere homo ex puris naturalibus sine speciali divina illustratione, neque ad sciendum aliquam veritatem in creaturis aspiciendo ad ipsam.

Si vero sciatur sincera veritas aspiciendo ad divinum exemplar ut ad rationem cognoscendi, hoc modo posuit PLATO omnem veritatem cognosci aspiciendo ad exemplar aeternum, secundum quod dicit AUGUSTINUS inducens ad hoc auctoritatem TULLII in Epistola ad Dioscorum: «*Illud*», inquit, «*attende quoniam Plato a Cicerone multis modis apertissime ostenditur in sapientia non humana, sed plane divina, unde humana quodammodo attenditur; in illa utique sapientia prorsus immutabili atque eodem modo semper se habente veritatem constituisse et finem boni et causas rerum et ratiocinandi fiduciam. Oppugnatos autem esse nomine Epicureorum et Stoicorum a Platonice eos qui in corporis vel in animi natura ponerent et finem boni et causas rerum et ratiocinandi fiduciam. Durasse tamen errores, sive de moribus sive de natura rerum sive de ratione investigandae veritatis, usque ad tempora Christiana, quos iam obmutuisse conspiciamus. Ex quo intelligitur ipsos quoque Platonice gentis philosophos, paucis mutatis quae Christiana improbat disciplina, invictissimo uni regi Christo pias cervices oportere submittere, qui iussit et creditum est quod illi vel proferre metuebant*».

Hanc igitur sententiam PLATONIS insecutus est AUGUSTINUS, secundum quod dicit in fine De Academicis: «*Nulli dubium est gemino pondere nos impelli ad descendendum, auctoritatis atque rationis. Mihi igitur certum est numquam prorsus a Christi auctoritate discedere. Non enim reperio valentiozem. Quod autem subtilissima ratione persequendum est — ita*

なものによって可能な限り、神の完全な認識が得られると哲学者たちは考えた。

しかし、神の範型のそのような[完全な]認識に、特別な照明なしに、純粋に自然本性的なものによって、人間は到達することができず、また、この世で通常の恩寵の光によって[到達すること]もできない。アウグスティヌスは『カトリックの信仰について』第一巻において、神に語りかけて言う。《貴方の本質は、形象や形相であると言われる。それは、あるところのものであるが、その他のものは、あるところのものではない。それは、「我はありてある」と最も真なる仕方であることができる。それは、あまりにも大きく高いので、それ[貴方の本質]の直視について「人間の心はこの世で敢えて手に入れようとはしない。これは、貴方の選ばれし人々だけに、後の報償の時のために取ってある、報償だからである」》<sup>53)</sup>。これは《神は人間が誰も見たこともなく見ることもできない到達不可能な光の中に住まう》(I Tim. 6:16)と言われているのと一致する。これは、《この世では[見ることはできないが]、後の世で見られるだろう》という意味である。確かにそれ[光]は、没我によって人間を感覚から切り離す、特別な恩寵の賜物によってでなければ、この世で見ることができない。『見神について、パウリーナへの書簡』におけるアウグスティヌスによれば<sup>54)</sup>、このような仕方、モーゼやパウロはこの世で本質によって神を見た。また、『対話』第4巻におけるグレゴリウスによれば、このような仕方、祝福された《ベネディクトは、一つの光線のもとで全世界を見た》<sup>55)</sup>。というのも、人間は、神の本性そのものに属する範型を見ることに、特別な神の照明なしに、純粋に自然本性的なものによって、到達することはできないので、[認識対象として]それ[神の本性]を参照することによって被造物において何らかの真理を知ること、到達することもできないからである。

しかし、(B2-2)もし神の範型を認識観点として参照することによって純正真理が知られるなら、この意味で、プラトンは、永遠の範型を参照することによってあらゆる真理が認識されると考えた。アウグスティヌスは、これに関して『ディオスコルスへの書簡』で、キケロの権威を引いて言う。《以下のことに注目せよ。キケロによって多くの仕方、この上なく明確に示されているように、プラトンは、真理、善の目的、事物の原因、そして推論の信頼性を、人間的ではなく明らかに神的な知恵—そこから人間の知恵は何らかの仕方、由来しているように思われる—の中に、すなわち、不変的でつねに同じ状態のまま留まる知恵の中に措いた。しかし、エピクロス派やストア派の名のもとに、善の目的、事物の原因、そして推論の信頼性を、物体や魂の本性の中に措いた人々は、プラトン派の人々によって攻撃された。にもかかわらず、彼らの誤りは、道徳、事物の本性、真理の探究方法のいずれに関するものにせよ、キリストの時代まで存続した。もっとも、今やそれらはなくなっているように見える。以上から分かるように、プラトン学派の哲学者たちも、キリストの教義が承認していない少しのことを変更した後、唯一の不可侵なる王キリストに対して敬虔な頭を垂れなければならない。キリストが命令したから、プラトン派の人々が口にするのも恐れられたことが信じられているのである》<sup>56)</sup>。

プラトンのこの考えに従って、アウグスティヌスは『アカデメシア派駁論』最終巻で言う。《権威と理性という二つを比較考量することによって、我々は学習へと動かされていることに疑いはない。したがって、私にとって確実なのは、けっしてキリストの権威から離れて学習を進めないことである。なぜなら、これより強いものは何も見出さないからである。しかし、私は今や、真なることを、信じることによってだけでなく、知解することによっても、把握することを欲する気持ちに

*enim iam sum affectus, ut quod sit verum non credendo solum, sed etiam intelligendo apprehendere desiderem —, apud Platonem me interim quod sacris nostris non repugnat me reperturum esse confido».*

Et est sententia quam in omnibus libris suis tenet, quam et cum ipso teneamus, dicendo quod nulla certa et infallibilis notitia veritatis sincera a quoquam potest haberi nisi aspiciendo ad exemplar lucis et veritatis increatae. Unde illi soli certam veritatem valent agnoscere qui eam in illo exemplari valent inspicere, quod «*non omnes valent*», ut dicit VIII<sup>o</sup> De Trinitate, sed «*pauci acie ingenii*» transmutabilia omnia valentes transcendere et regulis immutabilibus de mutabilibus iudicare, «*de quibus nullus iudicat, et sine quibus nullus certe iudicat*», ut dicit in II<sup>o</sup> De libero arbitrio, cap.<sup>o</sup> 6<sup>o</sup>. Hinc dicit VIII<sup>o</sup> De Trinitate: «*Formas rerum corporalium per sensus haustas et quodammodo infusas memoriae, ex quibus etiam ea quae non sunt visa ficto phantasmate cogitantur, sive aliter quam sunt sive fortuito quomodo sunt, aliis omnino regulis super mentem nostram immutabiliter manentibus vel approbare apud nosmet ipsos vel improbare convincimur cum recte aliquid approbamus aut improbamus*». Et ibidem: «*Cum arcum pulchrum et aequaliter intortum quem vidi Carthagini animo revolvo, res quaedam menti nuntiata per oculos memoriaeque transfusa imaginum aspectum facit, sed aliud mente conspicio, secundum quod mihi opus illud placet. Unde etsi displiceret, corrigerem. Itaque de istis secundum illud iudicamus et cernimus rationalis mentis intuitu. Ista autem praesentia corporis tangimus, aut imagines absentium fixas in memoria recordamur aut eorum similium talia fingimus, aliter figurantes animo imagines corporum aut per corpus corporalia videntes, aliter autem rationes artemque ineffabiliter pulchram talium figurarum super aciem mentis simplici intelligentia capientes. In illa ergo arte in qua temporalia facta sunt omnia, formam secundum quam sumus, et secundum quam vel in nobis vel in corporibus vera et recta ratione aliquid operatur; visu mentis aspiciamus, atque inde conceptam rerum veracem notitiam tamquam verbum apud nos habemus, et dicendo intus gignimus*». Et hoc non solum de huiusmodi rebus corporalibus, sed etiam de incorporalibus, secundum quod dicit in Epistola quadam ad Nebridium: «*Veniat in mentem illud quod 'intelligere' appellamus duobus modis in nobis fieri, aut ipsa per se mente atque ratione intrinsecus, aut admonitione a sensibus. In quibus duobus illud primum, id est de eo quod apud nos est, Deum consulendum; hoc autem secundum, de eo quod a corpore sensuque nuntiatur; nihilo minus Deum consulendum intelligimus*». Et sic de universis quae intelligimus «*intus praesentem ipsi menti consulimus veritatem*», ut dicit in libro De magistro. «*De qua micat omne quod rationabili menti lucet*», ut dicit ANSELMUS, Proslogion 14<sup>o</sup> cap.<sup>o</sup> Quomodo autem hoc

なっているから、最も精緻な理性によって探求されるべきことに関して、プラトンの中に、我々の聖なる教えと矛盾しないことしか私は見い出さないだろうと、今私は確信している》<sup>57)</sup>。

そして、これ〔プラトンの考え〕は、彼〔アウグスティヌス〕が全著作において保持した命題であり、我々も彼と共に保持しようとする命題である。すなわち、純正真理の确实で不可謬な知は、創造されない〔永遠の〕光と真理である範型を〔認識観点として〕参照することによって以外、いかなるものからも得られないと、彼〔アウグスティヌス〕は言う。したがって、それ〔永遠の光と真理〕をその範型において見ることのできる者のみが、确实な真理を認識することができるのだが、このことは、アウグスティヌスが『三位一体論』第8巻で言うように、《誰にでもできるわけではなく》<sup>58)</sup>、《天賦の眼差しによって》あらゆる可變的事物を超越することができ、不變的規則によって可變的事物について判断することができる《ごく少数の者》<sup>59)</sup>だけができる。《それ〔不變的規則〕については誰も判断することはできず、またそれ〔不變的規則〕なしに誰も确实に判断することができない》<sup>60)</sup>。こうして、アウグスティヌスは『三位一体論』第8巻で言う。《身体感覚をとおして取り入れられ、何らかの仕方で記憶に移入された、物的事物の形相は、そこから作り出された表象（実物と違ってしようと、ひよっとすると実物どおりであろうと）において見えていないものが考えられる出発点となるが、そのような形相を正しく是認したり否認するとき、我々は、我々の精神を超越して不變的に留まっているまったく別の規則に従って、我々自身の内部で確信を持って是認したり否認するのである》<sup>61)</sup>。また、同所で言う。《私がカルタゴで見た美しい均斉のとれたアーチを心に回想するとき、目をとおして心に告知され、記憶の中に移設されたものがその像の相貌を作る。しかし、私は心では別のものを見、それに従って私はその作品の美しさを気に入る。もし気に入らなければ、それに従って訂正するだろう。こうして、それに従って私はそれらのものを判断し、理性的な心の直観で見る。他方、私たちは現存している物体には身体感覚で触れる。現存していない物体の場合、記憶の中に置かれたその像を想起する。または、そのような像をそれらに似たものから作り出す。しかし、心の中で物体の像を描いたり身体をとおして物体を見ることと、心の眼差しを超越したこのような姿形の理念と言いがたく美しい技術知を単純な知性で捉えることとは別である。それゆえ、あらゆる時間的なものがそれに従って造られたその技術知の中に、私たちは心の目をとおして形相を見る。この形相に従って我々はあり、またこの形相に従って、我々の中でも物体の中でも真なる正しいラチオによって、ある何かがなされる。そしてこの形相から懐念された、事物についての真なる知を、我々の内にある言葉として抱き、内的に語ることによって生み出す》<sup>62)</sup>。このことは、そのような物的事物についてだけでなく、非物的なものについても当てはまる。アウグスティヌスは『ネブリディウスへの書簡』で言う。《「知解」と呼ばれるものは、二通りの仕方で我々の心に生じる。一つは、内的に心や理性それ自体によってであり、もう一つは、感覚の示唆によってである。これら二つのうち、第一、すなわち我々の内にあるものに関しては、神に相談しなければならない。第二、すなわち物体と感覚によって知らされるものに関しても、神に相談しなければならないと理解している》<sup>63)</sup>。こうして、我々が知性認識するあらゆるものに関して、アウグスティヌスが『教師論』で言うように、《我々は内的に心それ自体に現存している真理に相談する》<sup>64)</sup>。アンセルムスが『プロスロギオン』で言うように、《理性的な心を照明するすべてのものは、その真理から光り輝いている》<sup>65)</sup>。このことがどのように生じるか

fiat, in quaestione proxima sequenti declarabitur.

(to be continued)

は、次の問題で説明される<sup>66)</sup>。

(未完)

### 訳注

1) *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, art.1-5, ed. Gordon A. Wilson (Ancient and Medieval Philosophy. De Wulf-Mansion Centre. Series II: *Henrici de Gandavo Opera Omnia*, vol.21), Leuven: Leuven University Press, 2005, pp. 3-28. “The Latin text is copyrighted and is published here with the permission of the editor, and with the knowledge and consent of the De Wulf-Mansion Center and Leuven University Press.”

33) cf. Augustinus, *De div. quaest.* 83, q.9 (CC lat. 44A, pp. 16, 9-10 et 17, 24-28; PL 40, 13-14).

34) Augustinus, *De vera religione*, c.30, n.56: Haec autem lex omnium artium cum sit omnino incommutabilis, mens uero humana, cui talem legem uidere concessum est, mutabilitatem pati possit erroris, satis apparet supra mentem nostram esse legem, quae ueritas dicitur. 「しかし、あらゆる術のこの法則は絶対的に不変なものであるが、そのような法則を見ることを許されている人間の精神は誤謬の可変性をうけるのであるから、真理と呼ばれる法則はわれわれの精神を超越したものであることは十分明らかである」。『真の宗教』茂泉昭男訳、『アウグスティヌス著作集 初期哲学論集(2)』教文館 1979, p. 341。ヘンリクスのテキストには、文頭の *Haec autem* がない。アウグスティヌスの引用箇所日本語訳は、特記しない限り『アウグスティヌス著作集』教文館を参照した。また、アウグスティヌスからの引用箇所の特定について平野和歌子さん(京大大学院文学研究科博士課程)のお世話になった。ここに記して感謝する。

35) cf. Augustinus, *op. cit.*, c.30, n.56: c.31, n.57-58 (PL): Nec jam illud ambigendum est, incommutabilem naturam, quae supra rationem animam sit, Deum esse; et ibi esse primam vitam et primam essentiam, ubi est prima sapientia. Nam haec est illa incommutabilis veritas, quae lex omnium artium recte dicitur et ars omnipotentis artificis. Itaque cum se anima sentiat nec corporum speciem motumque iudicare secundum seipsam, simul oportet agnoscat praestare suam naturam ei naturae de qua iudicat, praestare autem sibi eam naturam, secundum quam iudicat, et de qua iudicare nullo modo potest. Possum enim dicere quare similia sibi ex utraque parte respondere membra cuiusque corporis debeant; quia summa aequalitate delector, quam non oculis sed mente contueor: quapropter tanto meliora esse iudico quae oculis cerno, quanto pro sua natura viciniora sunt iis quae animo intellego. Quare autem illa ita sint, nullus potest dicere: nec ita debere esse quisquam sobrie dixerit, quasi possint esse non ita.

Quare autem nobis placeant, et cur ea, quando melius sapimus, vehementissime diligamus, ne id quidem quisquam, si ea rite intellegit, dicere audebit. Ut enim nos et omnes animae rationales, secundum veritatem de inferioribus recte iudicamus; sic de nobis, quando eidem cohaeremus, sola ipse Veritas iudicat. ... Omnia ergo iudicat, quia super omnia est, quando cum Deo est. Cum illo autem est, quando purissime intellegit, et tota caritate, quod intellegit, diligit. Ita etiam, quantum potest, lex ipsa etiam ipse fit, secundum quam iudicat omnia, et de qua iudicare nullus potest. 「理性的魂を超えるところの不変の本性は神であるということ、第一の知恵が存在するところに、第一の生命、第一の本質が存在するということは疑われるべきではない。なぜなら、この第一の知恵が、すなわち、すべての術の法則、全能なる芸術家の術と呼ばれるところの、不変の真理なのである。そし

て、魂自身は物体の形や運動を自分自身に従って判断しているとは感じていないのであるから、魂は、同時に、自己の本性は、自己がそれについて判断するところのものの本性〔すなわち判断の対象〕よりも、すぐれているが、それに従って判断するところのものの本性〔すなわち判断の規準〕は、自らよりもすぐれており、そのものについては決して判断することはできないということを承認しなければならない。なぜ、個々の身体の肢体が同じように両方の側から対応しなければならないのか、わたしは言うことができる。その理由は、身体の目によってではなく、精神の目によって観察することのできる最高の同等性を、わたしは喜ぶからである。それゆえにわたしは、わたしが目をもって認識するものが、わたしが魂によって知解するところのものに、その本性において近ければ近いほど、いっそうよいものであると判断するのである。しかしながら、何故それがそうであるのかということについては、だれも言うことはできないのである。まだ、そのようにあるべきであるとは、だれも慎重に言うことはできないのである。そのようではなくあることも、できるかもしれない。

しかし、何故それら〔知性的なもの〕がわれわれの気に入るのか、そして、われわれがそれらを味わえば味わうほど、われわれは何故それらをいよいよ熱心に愛するのか、と——もしそのことを正しく理解しさえするならば——だれもあえて言わないであろう、なぜなら、われわれおよびすべての理性的魂が真理に従って、より劣ったものについて正しく判断を下すように——われわれが真理に固く結びついているときには——真理それ自身がわれわれについて判断を下すからである。……であるから、霊的な人間は神と共に在るときには、すべてのものを越えてあるのであるから、すべてのものに判断を下すのである。しかしながら、彼は、最も純粹に知り、かつ知ったものをまったく愛をもって愛するとき、神と共に在るのである。なぜなら、このようにしてできる限り彼自身法則そのものとなり、その法則に従って〔他の〕すべてのものを判断するが、法則そのものについてはだれも判断することができないものとなるからである。『真の宗教』茂泉昭男訳、1979、pp. 341-342。

36) cf. Augustinus, *De div. quaest.* 83, q.9 (CC lat. 44A, p. 17, 27-28; PL 40, 14).

37) Augustinus, *Soliloquia*, I, c.2 (PL, p. 870): Deus qui nisi mundos verum scire noluisti. 「神よ、あなたは心の清い人でなければ真なるものを知ることを望みたまわない。『ソリロキア』清水正照訳、1979、p. 331。

38) Augustinus, *Retractationes*, I, c.4, n.2: In his sane libris non approbo, quod in oratione dixi: *Deus, qui nisi mundos uerum scire noluisti. Responderi enim potest multos etiam non mundos multa scire uera; neque enim definitum est hic, quid sit uerum quod nisi mundi scire non possint, et quid sit scire*; et illud quod ibi positum est: *Deus, cuius regnum est totus mundus, quem sensus ignorat*. 「この書物の中でわたしが祈りの中で言ったこと、すなわち「神よ、あなたは心の清い人でなければ真なるものを知ることを望みたまわない」(一・一・2)ということ、わたしは十分に証明していない。というのは多くの心清らかざる者もまた多くの真なるものを知っていると答えられるからである。また、心の清からざる者が知りえない真なるものとは何か。さらに、知るとはどういうことか、などが定義されていないからである。「神よ、あなたは感覚の知らざる世界の全域を統べたもう」(一・一・3)とわたしは言った。『再考録』清水正照訳、1979、pp. 450-451。太字部分がヘンリクスの引用箇所に対応する(以下、同)。下線部 *non possint* は、ヘンリクスのテキストでは、*possunt* となっている。

39) Augustinus, *Epistola ad Discorum*, 118, 16 (CSEL 34, p. 681, 5-6).

40) Augustinus, *Contra Academicos*, III, c.11, n.26 (CCSL): Quicquid enim contra sensus ab eis disputatur, non contra omnes philosophos valet. **Sunt enim qui omnia ista, quae corporis sensu accipit animus, opinionem posse gignere confitentur, scientiam uero negant, quam tamen**

**uolunt intellegentia contineri remotamque a sensibus in mente uiuere.** Et forte in eorum numero est sapiens ille quem quaerimus. 「思うに、アカデミア派の人々が感覚に反対して何と言い争ってみても、それはすべての哲学者たちに対して必ずしも有効とは限らないのである。たとえば、精神が身体感覚によって受容するものはすべて臆見を生むことは認めるが、知識を生むことについては否定する哲学者たちがいる。だが彼らは、英知に知識が含まれることや、知識は感覚から離れて知性の中に生きていることは認めようというのである。わたしたちが求めているあの知者は恐らくこの哲学者たちのうちに見出されるであろう。『アカデミア派駁論』清水正照訳、1979、p. 126。下線部 accipit animus は、ヘンリクスのテキストでは、たんに attingit となっている。また、ヘンリクスのテキストには、tamen はない。

41) Augustinus, *op. cit.*, II, c.5, n.11 (CCSL): Hoc prorsus non posse inueniri uehementissime ut conuincerent incubuerunt. Inde dissensiones philosophorum, inde sensuum fallaciae, inde somnia furor- esque, inde pseudomeni et soritae in illius causae patrocini- uiguerunt. **Et cum ab eodem Zenone accepissent nihil esse turpius quam opinari, confecerunt callidissime, ut si nihil percipi posset et esset opinatio turpissima, nihil unquam sapiens approbaret.** 「これに対してアカデミア派の人々は、そのようなものは決して見出されないと熱烈に説得しようとしている。こうして、彼らは自分の立場を守るために、哲学者たちの不一致、感覚の錯覚、夢や狂気、誤謬推理や誤謬連鎖法などを挙げる。さらに彼らは、この同じゼノンから借りてきて、臆見することよりも愚かなことではないと言って、きわめて巧妙にも、もしも何ものも認知されえず、また、臆見がきわめて愚かなことであるならば、知者はなにものをも是認しない、と帰結する」。前掲訳書、p. 62。下線部は、ヘンリクスのテキストでは、Cum enim eis nihil turpius visum est quam opinari et nihil percipi posse concluderunt, ut nihil sapiens unquam approbaret となっている。

42) Augustinus, *op. cit.*, II, c.10, n.24 (CCSL): Non est ista, inquam, mihi crede, uerborum, sed rerum ipsarum magna controuersia; non enim illos uiros eos fuisse arbitror, qui rebus nescirent nomina imponere, **sed mihi haec uocabula uidentur elegisse et ad occultandam tardioribus et ad significandam uigilantioribus sententiam suam.** 「わたしは答えて、「そうではないのだ」といった、「どうか信じてくれたまえ。それは言葉だけについての論争ではなく、事柄そのものについての重大な論争なのだ。アカデミア派の人々が、事柄そのものに名前を正しくあてがうことのできないような人たちであるとわたしは思わない。むしろ、彼らは自分たちの学説を頭脳鈍重な人には隠して、頭脳鋭敏な人には明らかにするために、こういう言葉を選んだとわたしは思う」。前掲訳書、p. 78。下線部は、ヘンリクスのテキストでは、Hoc mihi uidentur egisse となっている。

43) Augustinus, *op. cit.*, II, c.13, n.29 (CCSL): Itaque responde, quaeso, **utrum tibi uideantur Academici habuisse certam de ueritate sententiam, et eam temere ignotis uel non purgatis animis proderere noluisse;** an uero ita senserint, ut eorum disputationes se habent. 「だから言いたまえ。きみはどう思うか。アカデミア派の人々は真理について確実な考えを持っていたのかどうか。また、無知な人々とか精神の純粹でない人々にやたらにそれを知らせることを欲しなかったのか。それとも逆に、彼らの議論の中で言われている通りの考えを持っていたのか」。前掲訳書、p. 85。下線部は、ヘンリクスのテキストでは、Certam enim habuerunt Academici de ueritate sententiam et eam temere ignotis uel non purgatis animis proderere noluerunt となっている。

44) Augustinus, *op. cit.*, III, c.17, n.37 (CCSL): **Quid igitur placuit tantis uiris perpetuis et pertinacibus contentionibus agere, ne in quemquam cadere ueri scientia uideretur? Audite iam paulo attentius non quid sciam sed quid existimem;** hoc enim ad ultimum reseruabam, ut expli-

carem, si possem, quale mihi uideatur esse totum Academicorum consilium. **Plato, uir sapientissimus et eruditissimus temporum suorum**, qui et ita locutus est, ut quaecumque diceret magna fierent, et ea locutus est, ut quomodocumque diceret, parua non fierent, dicitur post mortem Socratis magistri sui, quem singulariter dilexerat a Pythagoreis etiam multa didicisse. 「それでは、絶えず頑強に言い争って、真なるものについての知識はどんな人の手にも入らないと思われるようにすることが、いったいどうしてこれほど偉大な人々に気に入ったのか。〔哲学史的事実として〕わたしが知っていることではなく、〔解釈として〕わたしが考えていることを、今暫く注意して聞きたまえ。わたしはこの解釈を最後まで保持し、アカデミア派の人々の意図のすべてをわたしに思われるものを、可能な限り説明しよう。

彼らの時代において最も知恵に富み最も学識ある人であったプラトンは、自分が言ったことが何であれ、それが重要なこととなるような仕方でも語ったし、また、どのようなやり方で言ったにせよ、その言ったことが決して些細なこととはならないようなことを語った。彼は深く愛する自分の師ソクラテスの死後、またピタゴラス派の人々から多くのことを学んだと言われている」前掲訳書、p. 143。ヘンリクスのテキストには、下線部 perpetuis et pertinacibus contentioneibus と、hoc enim ad ultimum reseruabam, ut explicarem, si possem, quale mihi uideatur esse totum Academicorum consilium。はない。また、下線部 existimem は、aestimem となっている。

45) Augustinus, *op. cit.*, III, c.17, n.37 (CCSL): Igitur Plato adiciens lepori subtilitatemque Socraticae quam in moralibus habuit, naturalium diuinarumque rerum peritiam, quam ab eis quos memorauit diligenter acceperat, subiungensque quasi formatricem illarum partium iudicemque dialecticam, quae aut ipsa esset aut sine qua sapientia omnino esse non posset, perfectam dicitur composuisse philosophiae disciplinam, de qua nunc disserere tempus non est. Sat est enim ad id, quod uolo, Platonem **sensisse duos esse mundos, unum intellegibilem, in quo ipsa ueritas habitaret, istum autem sensibilem**, quem manifestum est nos uisu tactuque sentire; itaque illum uerum, hunc ueri similem et **ad illius imaginem factum, et ideo de illo in ea quae se cognosceret anima uelut expoliri et quasi serenari ueritatem, de hoc autem in stultorum animis non scientiam sed opinionem posse generari**; quidquid tamen ageretur in hoc mundo per eas uirtutes, quas ciuiles uocabat, aliarum uerarum uirtutum similes quae, nisi paucis sapientibus ignotae essent, non posse nisi ueri simile nominari. 「こうしてプラトンは、自分が道徳的問題に関して受け継いだソクラテ斯的才知と鋭敏さに、さらに、自然のおよび神的事物に関する知識をつけ加えた。彼はこの知識を、わたしが先に言及したピタゴラス派の人々からきわめて注意深く得た。次いで彼は、この二つの知識を構成するいわば論理と判断を弁証論に結びつけた。この弁証論はそれ自体知恵であるか、あるいは、それなくしては知恵がありえないものかであって、いずれにせよ哲学の完全な学問体系をつくり上げるものと言われるが、これについて今は論ずべき時ではない。というのは、わたしが意図することのためには、プラトンが二つの世界、すなわち、一方はそこに真理自体が常在する英知界、他方は明らかにわたしたちが見たり触れたりして感覚する感覚界の存在を認知していたということでも十分であるからだ。

こうして一方の世界は真実であるが、他方の世界は真なる世界に似せて、その形姿に従ってつくられたものである。それゆえ、真理は前者から、自分自身を認知する魂において輝きいわば透明にされるが、後者から暗愚な人々の魂に生じるものといえ、決して知識ではなく、たかだか臆見にすぎない。プラトンが市民的徳と呼んだあの徳（これはわずかの知者にしか知られていない他の真実の徳に似ているにすぎない）に従って、この世界においてどんなことがなされようとも、その行為は似真的なものとしか名づけられないのである」。前掲訳書、p. 144。ヘンリクスのテキストでは、前注の箇

所と本注の箇所との間に“fuit, quem certum est”が挿入されている。ヘンリクスのテキストには、下線部 ideo はなく、in ea は in eam、habitaret は habitat、anima は animam、de hoc は de isto となっている。cf. Augustinus, *Retractationes*, I, c.3, n.2: Verum et in his libris displicet mihi (...) et quod duos mundos, unum sensibilem alterum intellegibilem, non ex Platonis vel ex Platoniorum persona, sed ex mea sic commendavi, tamquam hoc etiam Dominus significare voluerit, quia non ait: “Regnum meum non est de mundo”, sed: *Regnum meum non est de hoc mundo*, cum possit et aliqua locutione dictum inveniri; et si alius a Domino Christo significatus est mundus, ille congruentius possit intellegi, in quo erit *caelum novum et terra nova*, quando complebitur quod oramus dicentes: *Adveniat regnum tuum*. Nec Plato quidem in hoc erravit, quia esse mundum intellegibilem dixit, si non vocabulum quod ecclesiasticae consuetudini in re illa inusitatum est, sed ipsam rem velimus attendere. Mundum quippe ille intellegibilem nuncupavit ipsam rationem sempiternam atque incommutabilem, qua fecit Deus mundum. Quam qui esse negat, sequitur ut dicat irrationabiliter Deum fecisse quod fecit aut, cum faceret vel antequam faceret, nescisse quid faceret, si apud eum ratio faciendi non erat. Si vero erat, sicut erat, ipsam videtur Plato vocasse intellegibilem mundum. Nec tamen isto nomine nos uteremur, si iam satis essemus litteris ecclesiasticis eruditi。「たしかにこの書物においても、わたしは次の点が気に入らない。……プラトン自身、あるいは、プラトン派の人々の権威によってではなく、わたし自身の固有の考えとして、二つの世界、つまり感覚的世界と英知的世界とを推賞したこと、すなわち、主が「わたしの国は世界のものではない」と言いたまわないで、「わたしの国はこの世界のものではない」(ヨハ一八・三六)と言いたもうたから、主もまたこのことを言おうとしようと欲したもうたかのように推賞したこと(一・二・32)。主のある言葉によってそう言われているのは見出されるが(ヨハ一八・三六)もし主キリストによって別の世界が意味されるとすれば、その世界は、「あなたの御国が来るように」(マタ六・一〇)というわたしたちの祈る内容が聴き入れられる時の、そこに「新しい天と新しい地」(イザ六五・一七、II ペテ三・一三)のある世界である、と理解したほうがよりふさわしいと考えられる。プラトンはこの点においてたしかに誤ってはいなかった。というのは、「英知的世界」という言葉は、教会の習慣ではこのような事柄に対しては用いられないのであるが、わたしたちがその事柄自体に目を向けるならば、プラトンは英知的世界があると云ったからである。彼は、実際、神がそれによって世界を創造したもうた、永遠不変の理性そのものを英知的世界という名で呼んだのだ。この理性の存在を否定するような人は、神は、自分の造りたもうたものを非理性的に造ったとか、あるいは、神のもとに創造する理性がなかったのならば、神は、創造する時や創造の前に、自分が創造するものを知らなかったとか、主張することになるであろう。だが、創造する理性があったとすれば——実際それはあったのだ——プラトンはその理性を英知的世界と呼んだと思われる。だが、もしわたしたちが教会の文書に十分通じていたならば、わたしたちはこのような名辞を用いなかっただろう」『再考録』清水正照訳、1979、pp. 323-324。

46) Augustinus, *Contra Academicos*, III, c.17, n.38 (CCSL): **Haec et alia huius modi mihi uidentur inter successores eius, quantum poterant, esse seruata et pro mysteriis custodita. Non enim aut facile ista percipiuntur nisi ab eis, qui se ab omnibus uitiis mundantes in aliam quamdam plus quam humanam consuetudinem uindicarint, aut non grauitur peccat, quisquis ea sciens quoslibet homines docere uoluerit. Itaque Zenonem principem Stoicorum, cum iam quibusdam auditis et creditis in scholam relictam a Platone uenisset, quam tunc Polemo retinebat, suspectum habitum suspicor nec talem uisum cui Platonica illa uelut sacrosancta decreta**

facile prodi committique deberent, priusquam dedidicisset ea, quae in illam scholam ab aliis accepta detulerat. Moritur Polemo, succedit ei Archesilas, Zenonis quidem condiscipulus, sed sub Polemonis magisterio. **Quam ob rem cum Zeno** sua quadam de mundo et maxime de anima, propter quam uera philosophia uigilat, sententia delectaretur dicens eam esse mortalem **nec quicquam esse praeter hunc sensibilem mundum nihilque in eo agi nisi corpore— nam et deum ipsum ignem putabat—prudentissime atque utilissime mihi uidetur Archesilas, cum illud late serperet malum, occultasse penitus Academiae sententiam et quasi aurum inueniendum quandoque posteris obruisse. Quare cum in falsas opiniones ruere turba sit pronior et consuetudine corporum omnia esse corporea facillime sed noxie credatur, instituit uir acutissimus atque humanissimus dedocere potius quos patiebatur male doctos quam docere quos dociles non arbitrabatur. Inde illa omnia nata sunt, quae nouae Academiae tribuuntur, quia eorum necessitatem ueteres non habebant. 「これらのことやその他こういった類のことはプラトンの後継者たちの間に、できる限り受け継がれ、また秘蹟として守られたようにわたしは思う。というのは、このようなことはすべての悪徳から自分を清めて、人間的な水準以上の何かより高い生き方をしようとする人々でなければ、容易に把握されないからである。それとも、このようなことを知って、どんな人々をも教えようと思う人は大きな罪を犯さないからである。こうしてストア派の始祖であるゼノンは、プラトンが残し、当時ポレモンが主管していたあの学校へやって来たが、その時彼は何か別の学説を聴聞して信じていたのではないかとわたしは疑惑を持っている。というのは、ゼノンは、あの有名な、いわば聖なる秘儀とされたプラトンの教説が抵抗なく委託されるに値する人であるとは思われていなかったからである。彼が他の学派から受け入れてプラトンの学校へ持ち込んだ教えを放棄するまで、彼に対する疑いは晴れなかった。**

ポレモンが死んで、ゼノンと共にその相弟子であったアルケシラオスとその後を継いだ、アルケシラオスはポレモンの学説を固めた。こういうわけであるから、ゼノンが世界に関して、特に魂に関して自分のある意見（真の哲学はいつも魂について目覚めていなければならぬとゼノンは考えていた）に心を奪われて、魂は可死的であり、この感覚界以外には何も存在せず、この世界ではすべてのものは形体的事物によってのみ動かされる——というのはゼノンはまた神御自身さえも火であると考えていたから——と説いて、この悪が広く流布されるのを見た時、アルケシラオスがアカデミア派の意見を深く隠して、その上それを、いわば他日後世の人々によって見出されるべき黄金のように、埋めて隠したのは、きわめて賢明かつ有益であったとわたしは思う。このようにして多くの人々は誤った臆見をさして突進し、そして彼らは形体的事物に慣れているものだから、一切は形体的なものであるという有害なことをいとも容易に信ずるに至った。きわめて頭脳鋭敏で深い教養のあるアルケシラオスは、教育困難な人々を教えるよりも、誤って悪しき教育を受けた人々の誤謬を正そうとした。こういう事情からして新アカデミア派に帰せられているか一切の教説が生じた。というのは新アカデミア派の先行者たちにはそういう教えの必要性はなかったからである。『アカデミア派駁論』清水正照訳、1979、pp. 144-146。下線部 poterant, uindicant, aut non grauitur、Zenonem principem Stoicorum、in eo、pronior、acutissimus atque humanissimus は、ヘンリクススのテキストでは、potuerunt, vindicant, grauitaque, Zeno, princeps Stoicorum, et ipse, paratior, acutissimus となっている。

47) Augustinus, *Epistola ad Discorum*, 118, 19-20 (CSEL 34, p. 683, 10-28)

48) Augustinus, *Contra Academicos*, III, c.17, n.38 (CCSL): **Inde illa omnia nata sunt, quae nouae Academiae tribuuntur**, quia eorum necessitatem ueteres non habebant. 「こういう事情からして新

アカデミア派に帰せられているかの一切の教説が生じた。というのは新アカデミア派の先行者たちにはそういう教説の必要性はなかったからである。『アカデミア派駁論』清水正照訳、1979、pp. 145-146。注 46 に続く箇所。ヘンリクスのテキストでは、tribuuntur は attribuuntur となっている。

49) Augustinus, *op. cit.*, III, c.17-18, n.39-41 (CCSL): **Namque Carneades primo illam uelut calumniandi impudentiam, qua uidebat Archesilam non mediocriter infamatum, deposuit;** ne contra omnia uelle dicere quasi ostentationis causa uideretur: sed ipsos proprie sibi Stoicos, atque Chrysippum conuellendos euertendosque proposuit. Deinde cum undique premeretur, si nulli rei esset assensus, nihil acturum esse sapientem — o hominem mirum atque adeo non mirum! ab ipsis enim Platonis fontibus profluebat—attendit sapienter, quales illi actiones probarent, easque nescio quarum uerarum similes uidens, id quod in hoc mundo ad agendum sequeretur, ueri simile nominauit. Cui enim esset simile et perite norat et prudenter tegebat idque etiam probabile appellabat. Probat enim bene imaginem, quisquis eius intuetur exemplum. Quomodo enim approbat sapiens, aut quomodo simile sequitur ueri, cum ipsum uerum quod sit ignoret? Ergo illi norant, et approbabant falsa in quibus imitationem laudabilem rerum uerarum animadvertebant. Sed quia hoc tamquam profanis nec fas, nec facile erat ostendere, reliquerunt posteris et quibus illo tempore potuerunt signum quoddam sententiae suae, illos autem bene dialecticos de uerbis mouere quaestionem insultantes irridentesque prohibebant. **Ob haec dicitur Carneades etiam tertiae Academiae princeps atque auctor fuisse. Deinde** in nostrum Tullium conflictio ista durauit iam plane saucia et ultimo spiritu Latinas litteras inflatura. Nam nihil mihi uidetur inflatius, quam tam multa copiosissime atque ornatissime dicere, non ita sentientem. Quibus tamen uentis feneus ille platonicus Antiochus satis, ut mihi uidetur, dissipatus atque dispersus est. Nam Epicureorum greges in animis deliciosorum populorum aprica stabula posuerunt. Quippe **Antiochus, Philonis auditor,** hominis quantum arbitror circumspicissimum, qui iam ueluti **aperire cedentibus hostibus portas coeperat et ad Platonis auctoritatem Academiam legesque reuocare— quamquam et Metrodorus id antea facere tentauerat, qui primus dicitur esse confessus non decreto placuisse Academicis nihil posse comprehendere, sed necessario contra Stoicos huius modi eos arma sumpsisse —** igitur Antiochus, ut institueram dicere, auditis Philone Academico et Mnesarcho Stoico in Academiam ueterem quasi uacua defensoribus et quasi nullo hoste securam uelut adiutor et cuius irreperat nescio quid inferens mali de Stoicorum cineribus, quod Platonis adita uiolaret. Sed huic arreptis iterum illis armis et Philon restitit, donec moreretur, et omnes eius reliquias Tullius noster oppressit se uiuo impatiens labefactari uel contaminari quidquid amasset. Adeo **post illa tempora non longo intervallo omni peruicacia pertinaciaque demortua os illud Platonis quod in philosophia purgatissimum est et lucidissimum, dimotis nubibus erroris emicuit maxime in Plotino, qui platonicus philosophus ita eius similis iudicatus est,** ut simul eos uixisse, tantum autem interest temporis **ut in hoc ille reuixisse putandus sit.** 「というのは、カルネアデスは、アルケシラオスの少なからぬ不評判の原因が行きすぎた〔反対論者への〕誹謗であったことを知り、過度の誹謗を棄てた最初の人であった。この配慮から、彼は人目につくようにすべてのことに反対して主張することを望まなかったように思われる。だが、ストア派の人々自身やまたクリュシッポスに対しては、これと戦って滅すことを特に自分の任務としていた。

ついでアルケシラオスは、もし知者が何ものについても同意しようとしなければ、知者も何ものもないことになると言って、あらゆる点から攻撃した。— おお、彼は何という賞賛すべき人であり、

しかもまた賞賛に値しない人であろう。というのは、彼はプラトンという源泉から流れ出たにすぎないから——彼は自分の論敵たちがどんな行為を是認するかをきちんと吟味し、それらの行為がどのような真なる行為に似ているか(わたしは知らないが)をみてとって、この世界において行為の模範として従うべきものを似真性と名づけた。この似せられている当のものを彼は熟知して、しかもそれを賢明にも隠したのである。彼はまたそれを蓋然性とも呼んだ。

思うに、その範型を注視している人はすべてまた似像を正しく認めるのである。もし真なるもの自体が何であるか知らないならば、知者であっても、いったいどのようにして真なるものに似ているものを認めるのであろうか。あるいはまた、どのようにして似真性に従って行為するのであろうか。それゆえアカデミア派の人々は、虚偽なるものを知っており、また是認しているのだ。そしてその虚偽なるものの中に、彼らは真なるものとの賞賛すべき似相を注視しているのだ。しかしこのことを大衆に知らせることは正しくないし、また容易でもなかったのだ、彼らはこれを後世の人々のために残し、当時の人々のためには、彼らができる限り、その意見のある種のしるしだけを残した。だが熟練した弁証論者たちについては、彼らが言葉についての問題を侮辱したり嘲笑したりすることで解決することを禁じた。このために、カルネアデスは、また、第三アカデミアの設立者であり、かつまた主唱者であったと言われている。

〔アカデミア派とストア派の〕抗争はわたしたちのトゥルリウス・キケロの時代まで続き、それはもうたしかに弱くなっていたが、抗争の最後の息吹きをラテン文字に吹き込んだのである。というのは、自分はそう考えていないのに、非常に多くのことをいかにも勿体ぶって麗々しく語ること以上にひどい誇張はないとわたしには思われるからである。ところがわたしのみるところでは、あの軽薄なプラトン主義者アンティオコスが、あなたがたのそんな誇張で完全に雲散霧消させられてしまった。獣群のようなエピクロス主義者たちについていえば、彼らは日の当たった家畜小屋を、快楽を求める人々の心の中に置いた。もちろん、アンティオコスはフィロンの弟子であったが、このフィロンはわたしの信ずるところでは、きわめて慎重な人であった。

彼は降服した敵に今やいわば門を開きにかかり、アカデミアをプラトンの権威と教えの下へ呼びもどし始めた。(実はメトロドロソもまたすでにそれをしようと試みてはいた。彼は、何ものも把握されえないという命題はアカデミア派の人々にとって本当の教えではなかった、それはただストア派の人々に対して戦うための武器として用いられたにすぎない、ということをも認めた最初の人であった)。それで、アカデミア派のフィロンとストア派のムネサルコスの子孫であったアンティオコスは(ここまではわたしが言いかけていたことであるが)、いわば防御者がなくまた敵もいないために、安全であるかのように考えていた古アカデミア派の中に、助力者かその一員であるかの如く装って入り込み、何かある悪(それがどんなものかわたしは知らないが)をストア派の燃え殻の中から持ち込んで、プラトンの秘められた教えを汚そうとした。だがフィロンは、アンティオコスに対しもう一度あの武器を強固にして、死ぬまで抵抗した。フィロンの死後、わたしたちのトゥルリウス・キケロはアンティオコスが遺したすべての著作を抹消し、自分の存命中は、自分が愛していたものはどんなものであっても、それが覆えされ痛めつけられるのを、じっと見ていることはできなかった。

すべての強情さと頑固さが死に果てて、哲学のうちで最も純化され最も光に満ちたあのプラトンの教えが、誤謬という雲を破ってその輝く顔を現わしたのは、特にプロティノスにおいてであった。ここに至るまでの時間はあのアンティオコス以後そんなに長くはなかった。ところでこのプロティノスはプラトン派の哲学者で、人々が自分たちはプラトンと同じ時代に生きていると思うほど、プラトンとよく似ているとみなされた。しかし、時代の差がある限り、むしろプラトンがプロティノスに再び生まれ変わったと考えるべきであろう。』『アカデミア派駁論』清水正照訳、1979、pp. 147-149。

- 50) Augustinus, *op. cit.*, III, c.18, n.40 (CCSL): Probat enim bene imaginem, quisquis eius intuetur exemplum. 「思うに、その範型を注視している人はすべてまた似像を正しく認めるのである」。前掲訳書、p. 147。これは、注 49 の二重下線部分である。ヘンリクスのテキストでは、下線部分 quisquis eius intuetur exemplum が、qui intuetur exemplar となっている。
- 51) Augustinus, *De civitate Dei*, XI, c.29 (CCSL): **Illi quippe angeli sancti** non per uerba sonantia Deum discunt, sed **per ipsam praesentiam immutabilis ueritatis**, hoc est Verbum eius unigenitum, et ipsum Verbum et Patrem et eorum Spiritum sanctum, eamque esse inseparabilem trinitatem singulasque in ea personas esse substantiam, et tamen omnes non tres deos esse, sed unum Deum, ita nouerunt, ut eis magis ista, quam nos ipsi nobis cogniti simus. **Ipsam quoque creaturam melius ibi, hoc est in sapientia Dei, tamquam in arte, qua facta est, quam in ea ipsa sciunt;** ac per hoc et se ipsos ibi melius quam in se ipsis, uerum tamen et in se ipsis. 「この聖なる天使たちは、耳に響く言葉によってではなく、**不変の真理の現前そのものによって**神を知ったのである。その真理とは神の独り子の御言葉であり、御言葉と御言葉の御父と両者の聖霊である。天使たちはまた、その真理が分離されない三位一体であり、その三つのペルソナ（位格）はそれぞれが実体であり、しかしそのすべては三なる神ではなくて一なる神であることを知ったのであるが、彼にとってこの知識は、わたしたちがわたしたち自身に知られている以上に確実である。彼らは**被造物を被造物自身においてよりもむしろかしこにおいて、すなわち諸物を造った術知としての神の知恵において、いっそうよく知ったのである**。したがって、彼らはまた、自己を自己において知っているとはいえ、かしこにおいていっそうよく知ったのである。」『神の国』泉治典訳、1981、p. 81。ヘンリクスのテキストには、下線部 quoque, hoc est in sapientia Dei はない。また、Illi, immutabilis は、それぞれ Ipsi, incommutabilis となっている。
- 52) Augustinus, *In Iohannis evangelium tractatus*, tract. 1, n.9 (CCSL): Refer animum ad illud uerbum. Si tu potes habere uerbum in corde tuo, tamquam consilium natum in mente tua, ut mens tua pariat consilium, et insit consilium quasi proles mentis tuae, quasi filius cordis tui. Prius enim cor generat consilium, ut aliquam fabricam construas, aliquid amplum in terra moliaris; iam natum est consilium, et opus nondum completum est; uides tu, quid facturus est, sed alius non miratur, nisi cum feceris et construxeris molem, et fabricam illam ad exsculptionem perfectionemque perduxeris: **adtendunt homines mirabilem fabricam, et mirantur consilium fabricantis; stupent quod uident, et amant quod non uident; quis est qui potest uidere consilium? Si ergo ex magna aliqua fabrica laudatur humanum consilium, uis uidere quale consilium Dei est Dominus Iesus Christus, id est, Verbum Dei? Adtende fabricam istam mundi; uide quae sint facta per Verbum, et tunc cognosces quale sit Verbum.** 「あのことばにあなたの思いをおくように。ちょうど理性の中に生まれた計画のように、ことばを心の中にもつことができるならば、あなたの理性は計画を生み、そしてその計画は心の子、理性から生まれ出たものであるかのように理性の中にあるだろう。というのも、まず心が計画を生み、それから建物を作り、あるいは地上に大きな構築物を組むことになる。しかし計画は生まれたが、作品はまだ出来上がっていない。あなたは作ろうとしているものを〔心の中に〕見ているが、他人はあなたが大きな建物の土台をおき、その構築物を組み立て完成に至らせるまでは驚嘆はしない。人々はすばらしい建物を見て、製作者の計画に驚嘆するのである。彼らはその見たものに仰天し、見えないものを愛する。だれがその計画を見ることができるのか。こうして、ある巨大な建物のために人間の計画が賞賛されるならば、あなたはイエス・キリストすなわち神の言が神のいかなる計画であるかを見ようと欲しているのではないだろうか。宇宙の建物に目を注ぎなさい。御言

によって造られたものを見るとき、あなたは御言がどれほどのものであるかを知るだろう」。『ヨハネによる福音書講解説教(1)』泉治典訳、1993、pp. 18-19。ヘンリクスのテキストでは、下線部 quis est qui potest uidere consilium?、Dominus Iesus Christus、Verbum が欠けており、また humanum が hominium となっている。

53) Ps.-Augustinus, *Speculum*, c.28 (PL 40, 980B).

54) cf. Augustinus, *Epist.*, 147, c.13, n.31 (CSEL 44, pp. 305, 3-306, 3).

55) Gregorius Magnus, *Dialogorum libri IV*, IV, c.8 (ed. A.De Vogue, p. 42, 2-8; PL 77, 332Bc).

56) Augustinus, *Epist.* 118, 20-21 (CSEL 34, pp. 684, 1-685, 8)

57) Augustinus, *Contra Academicos*, III, c.20, n.43 (CCSL): A quo me negotio quoniam rationes Academicorum non leviter deterrebant, satis, ut arbitror, contra eas ista disputatione munitus sum. **Nulli autem dubium est gemino pondere nos impelli ad discendum auctoritatis atque rationis. Mihi ergo certum est nusquam prorsus a Christi auctoritate discedere; non enim reperio ualentiorum. Quod autem subtilissima ratione persequendum est—ita enim iam sum affectus, ut quid sit uerum, non credendo solum sed etiam intellegendo apprehendere impatienter desiderem—apud Platonicos me interim, quod sacris nostris non repugnet, reperturum esse confido.** 「思うに、わたしはこの討論でアカデミア派の論点に対して、十分に自分を守ったのであるから、アカデミア派の人々の論拠がわたしに対してこの仕事の妨害をすることは、そう易々とはできないであろう。わたしたちは知恵を学ぶのに二つの強い力、すなわち権力と理性の力によって動かされているのをだれも疑わない。だが、どんな場合でもわたしはたしかにキリストの権威から決して離れない。実際、それ以上に強力な権威をわたしは見出さないのである。しかし、精密な理性によって究められ明らかにされるべきことについては(というのは、わたしは真なるものが何かを、信ずることによってだけでなく、また理解することによっても、手にしたいと性急に望んでいるような状態だったから)、プラトン派の人々の中に、わたしたちの秘儀と矛盾しないものをわたしが見出すであろうと、今は確信している」。『アカデミア派駁論』清水正照訳、1979、p. 152。ヘンリクスのテキストでは、下線部 egro、Platonicos、repugnet は、それぞれ igitur、Platonem、repugnat me となっている。

58) Augustinus, *De Trinitate*, VIII, c.6, n.9 (CCSL): Illud mirabile ut apud se animus uideat quod alibi nusquam uidet, et uerum uideat, et ipsum uerum iustum animum uideat, et sit ipse animus et non sit iustus animus quem apud se ipsum uidet. Num est alius animus iustus in animo nondum iusto? Aut si non est, quem ibi uidet, cum uidet et dicit quid sit animus iustus, nec alibi quam in se uidet, cum ipse non sit animus iustus? An illud quod uidet ueritas est interior praesens animo qui eam valet intueri? **Neque omnes ualent**, et qui intueri ualent hoc etiam quod intuentur non omnes sunt, hoc est non sunt etiam ipsi iusti animi sicut possunt uidere ac dicere quid sit iustus animus. 「けれども、魂が他のところでは見なかったものを自身の許で見、しかも真なるものとして見、また真に正しい魂を見ること、さらに、自身は魂ではあるが自身の許で見る正しい魂ではないということは、実に不思議である。それでは、まだ正しくない魂の中に他の正しい魂があるのだろうか。あるいは、魂が正しい魂とは何かを見てそれを口にすると、そこに見るものが存在しないならばその魂自身は正しい魂ではないのだから、自身以外のところでは見ないのだろうか。それとも、魂が見るものは、それを直視することのできる魂に現在する内なる真理なのだろうか。すべての人がそれを直視できるのではない。また直視できる人の皆が、直視する当のものではない。すなわち、正しい魂とは何かを見て語りうる、正しい魂そのものではない」。『三位一体』泉治典訳、2004、pp. 246-247。ヘンリクスのテク

ストでは、下線部 Neque は non となっている。

- 59) cf. Augustinus, *op. cit.*, XIII, c.9, n.12 (CCSL): Humanis quippe argumentationibus haec inuenire conantes uix **pauci magno praediti ingenio** *abundantes otio* doctrinisque subtilissimis eruditi ad indagandam solius animae immortalitatem peruenire potuerunt. 「人々は [権威にもとづかない] 人間的な論証を重ねてこの問題に答えようと努めたが、魂の不死の観念に達したのはごく少数者であり、しかも難儀なしにはなかった。彼らは偉大な天賦と豊富な余暇を持ち、十分な教育によって鍛えられた者であるが。」前掲訳書、p. 375。ヘンリクスのテキストでは、下線部 pauci magno praediti ingenio は、pauci acie ingenii となっている。
- 60) Augustinus, *De libero arbitrio*, II, c.14, n.38 (CCSL): De toto mundo ad se conuersis qui diligunt eam omnibus proxima est, omnibus sempiterna, nullo loco est nusquam deest, foris admonet intus docet, cernentes se commutat omnes in melius, a nullo in deterius commutatur, **nullus de illa iudicat nullus sine illa iudicat bene**. 「それを愛して世界の隅々からやってくるすべての人にもっとも近くあり、永遠にあり、どんな場所にも縛られず、その響きが伝わってこない場所はない。それは外から戒めを与え、内から教える。そして、それを見るすべての人をいっそう善きものに変え、しかも自らは劣れるものにならない。人はそれについて判断しないが、それなしには正しい判断をすることができない」。『自由意志』泉治典訳、1989、p. 120。ヘンリクスのテキストでは、太字部分 nullus de illa iudicat nullus sine illa iudicat bene は、de quibus nullus iudicat, et sine quibus nullus certe iudicat となっている。
- 61) Augustinus, *De Trinitate*, IX, c.6, n.10 (CCSL): Vnde etiam phantasias **rerum corporalium per corporis sensum haustas et quodam modo infusas memoriae, ex quibus etiam ea quae non uisa sunt ficto phantasmate cogitantur siue aliter quam sunt siue fortuito sicuti sunt, alii omnino regulis supra mentem nostram incommutabiliter manentibus uel approbare apud nosmetipsos uel improbare conuincimur cum recte aliquid approbamus aut improbamus**. Nam et cum recolo Carthaginis moenia quae uidi et cum fingo Alexandriae quae non uidi easdemque imaginarias formas quasdam quibusdam praeferens, rationabiliter praefero. Viget et claret desuper iudicium ueritatis ac sui iuris incorruptissimis regulis firmum est, et si corporalium imaginum quasi quodam nubilo subtexitur, non tamen inuoluitur atque confunditur. 「私たちはまた、物的なもの表象 (**phantasia**) を身体感覚をとおして取り入れ、それらを何らかの仕方記憶に移し、そこからまだ見ていないが考えようとしているものの想像物 (**phantasma**) を作り出すのである。それらは実物とは違うかもしれないし、全く偶然に一致することもある。そしてそれらが表すものを正しく承認あるいは否認するとき、私たちの精神の上に不変的にとどまる全く別の規範に従って、私たち自身の中で承認あるいは否認するという判断を下し、これについて明瞭な確信を持つのである。こうして、私は既に見たことのあるカルタゴの城壁を想起するとき、そしてまだ見たことのないアレクサンドリアの城壁を想像して、その中にある想像物を他の想像物よりもよいとすると、私は理にかなった選択をしているのである。真理の判断は感性的な想像物を超えていきいきと輝き、自らの法則の公平な規則でもって堅固なものとしてある。それは雲のような物体の想像物によって覆われるとしても、決してその中に巻き込まれて解体することはない」。『三位一体』泉治典訳、2004、pp. 267-277。ヘンリクスのテキストでは、下線部分 Vnde etiam phantasias, sicuti, per corporis sensum, incommutabiliter は、それぞれ Formas, quomodo, per sensum, incommutabiliter となっている。なお、引用箇所は、ヘンリクスのテキストでは VIII *De Trinitate* となっているが、実際には、本注のとおり IX, c.6 である。

62) Augustinus, *op. cit.*, IX, c.6-7, n.11-12 (CCSL): Item cum arcum pulchre et aequabiliter intortum quem vidi verbi gratia, Carthagine animo revoluo, res quaedam menti nuntiata per oculos memoriaeque transfusa imaginarium conspectum facit. Sed aliud mente conspicio secundum quod mihi opus illud placet, unde etiam si displiceret corrigerem. Itaque de istis secundum illam iudicamus, et illam cernimus rationalis mentis intuitu. Ista uero aut praesentia sensu corporis tangimus aut imagines absentium fixas in memoria recordamur aut ex earum similitudine talia fingimus qualia nos ipsi si uellemus atque possemus etiam opere moliremur, aliter figurantes animo imagines corporum aut per corpus corpora uidentes, aliter autem rationes artemque ineffabiliter pulchram talium figurarum super aciem mentis simplici intellegentia capientes.

In illa igitur aeterna ueritate ex qua temporalia facta sunt omnia formam secundum quam sumus et secundum quam vel in nobis vel in corporibus vera et recta ratione aliquid operamur uisu mentis aspiciamus, atque inde conceptam rerum ueracem notitiam tamquam uerbum apud nos habemus et dicendo intus gignimus, nec a nobis nascendo discedit. 「同様に、私がカルタゴで見た美しい均斉のとれたアーチを想起するとき、目をとおして精神に知られ、記憶の中に移し置かれたものがあって、それが想像的な表象を作るのである。しかし、私が精神をもって見たものはこれとは別で、私はそれによって作品の美しさを承認し、もし気に入らなければそれによって訂正するであろう。こうして、私はそれらのものを真理の形相に従って判断し、そしてその形相を理性的な精神の目で見るのである。他方、私たちが身体感覚で触れるものは、現存している物的なものである。それが現存していないならば記憶の中に置かれたその表象を想起し、あるいはそれらに似た諸要素を合わせて表象を作り出す。私たちはこれを作ろうとする意志や能力を持つ限り、私たち自身の作品として作り出すだろう。しかし、私たちが意識の中で物体の表象を描いたり、身体をとおして物体を見ることと、精神のまなざしの上にあるこのような形象の均斉さと言いがたく美しい技巧と純一な知性でもってとらえることとは別である。

それゆえ、すべての時間的なものがそれにもとづいて造られたあの永遠の真理の中に、私たちは精神の目をもって形相を見る。私たちはこの形相に従って存在し、またこの形相に従って私たち自身の中でか物体の中でか、真にして正しい理性をもってある働きをなすのである。そして私たちはこの形相から事物の真の知識を〔精神の中に〕孕み、これを内的に語ることで生み出す言葉のようなものとして私たちの許に置く。その言葉は生み出されたあと私たちから離れるのではない。『三位一体』泉治典訳、2004、pp. 269-270。下線部 Item cum arcum pulchre et aequabiliter intortum, verbi gratia, Carthagine, conspectum, etiam si, uero, sensu corporis, earum, corpora, igitur aeterna ueritate ex, operamur は、ヘンリクススのテキストでは、Cum arcum pulchrum et aequabiliter intortum, Carthagini, aspectum, etsi, autem, corporis, eorum, corporalia, ergo arte in, operatur となっている。また、下線部 qualia nos ipsi si uellemus atque possemus etiam opere moliremur, の部分は、ヘンリクススのテキストにはない。

63) Augustinus, *Epist.* 13, 4 (CSEL 34, p. 31, 18-26)

64) Augustinus, *De magistro*, c.11, n.38 (CCSL): De uniuersis autem, quae intellegimus, non loquentem, qui personat foris, sed intus ipsi menti praesidentem consulimus ueritatem, uerbis fortasse ut consulamus admoniti. Ille autem, qui consulitur docet, qui in interiore homine habitare dictus est Christus, id est incommutabilis dei uirtus atque sempiterna sapientia, quam quidem omnis rationalis anima consulit, sed tantum cuique panditur, quantum capere propter propriam siue malam siue

bonam uoluntatem potest. 「われわれが知解することのできる普遍的なものについては、われわれはおそらく言葉によって真理と相談するように促されるのであるけれども、われわれは外に響くところのその言葉に相談するのではなく、**内奥にあって精神そのものを支配する真理に相談するのである**。しかしながら、教えるのは、相談されるところの人、内的人間に住むと言われるキリスト、すなわち、不変の神の力、永遠の知恵なのである。実際、すべての理性的魂はそれ（永遠の知恵・キリスト）に相談する。しかし、悪い意志であろうと良い意志であろうと、それぞれの固有性に従って、つかみうる限りの能力がそれぞれに与えられている」。『教師』茂泉昭男訳、1979、p. 266。下線部 praesidentem は、ヘンリクスのテキストでは praesentem となっている。

65) Anselmus, *Proslogion*, c.14 (ed. F.S.Schmitt, I, p. 112, 5-6).

66) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.3.